

二ノ谷古窯跡

発掘調査報告書

1985

小笠町教育委員会

二ノ谷古窯跡

発掘調査報告書



1985

小笠町教育委員会

序

近年、社会的経済的諸条件の変化を背景として、広く国民の間に、多様な文化的欲求が高まっております。

わが小笠町も、町民の同様な欲求に対応すべく各種の文化施策に取り組んでおりますが、その施策の一つとして、わが町の遠い歴史の中で生まれた文化遺産を大切に保存し、また受け継がれたものを伝承して後世に伝え、或は、広くその活用を図ることも大切なことであると考え、各種の文化財保護事業を行っています。

こうした考え方の中で、このたび国、県の補助を得て、当町大字河東字今間地内の「二ノ谷古窯跡」の発掘調査事業を実施して、その成果を記録保存し、後世に伝えるため、ここに、その調査報告書を発刊する運びとなった次第であります。

今年は、ことのほか暑さがきびしかったのですが、その猛暑の中を一日も欠かさず、この発掘調査に当られた渡辺先生をはじめ、作業に従事された方々の御苦勞は大変なもので、ここに改めて調査に打込んだ情熱に敬意を表し、その御苦勞に対して御礼を申し上げて序文といたします。

昭和 59 年 11 月

小笠町教育委員会教育長

赤 堀 英 夫

例 言

1. 本書は、国・県の補助金を得て小笠町教育委員会が主催して発掘調査を実施した。小笠町河東 54 42～141 に所在する二ノ谷古窯跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は昭和 59 年 9 月 3 日から同年 10 月 12 日までを要し、渡辺康弘（早稲田大学大学院博士課程）が担当者となり実施した。
3. 資料整理にあたっては、田中貢（町立北小学校校長）先生から多大な御教示と御指導をいただき小川英文（早稲田大学大学院博士課程）氏には多大な御協力をいただいた。
4. 調査期間中には、渋谷昌彦、坂巻隆一（島田市教育委員会）、吉岡伸夫、松井一明（袋井市教育委員会）、前田庄一、高野由美子（坂尻遺跡調査団）、水島和弘（菊川町教育委員会）の諸氏に貴重な御教示をいただいた。
資料整理に際しては、向坂鋼二（浜松市博物館館長）、瀬川裕市郎（沼津歴史民俗資料館）、笹原芳郎（明治大学生）の諸氏に御教示をいただいた。
5. 本書の執筆・編集は渡辺康弘が行ったが、田中貢先生には王稿をいただいた。
お忙しい中無理な依頼に快諾をいただき、厚く感謝申しあげる次第である。
6. 調査にあたって、町教育委員会当局の全面的な協力を得た。また本書出版に至るまでの調査に関する事務も町教育委員会が行った。

調査関係者名簿

調査参加者……武井岩雄、井上猪子太郎、今坂覚、竹沢九二雄、井上つな、篠田うめ、
今坂みつえ、今坂あい、森正太郎

整理参加者……赤堀正治

文化財保護審議委員……宮城孝平、松下儀一郎、増田邦雄、三浦実、田中秀貴

郷土研究会……竹内悦男、鈴木忠雄、松下三郎

参観者……松下勉、今城義郎、山下昇、斎藤三作

教育委員会……教育長・赤堀英雄、事務局長・樽松康弘、社会教育係長・赤堀啓二、
社会教育係・宮城義信、竹内英俊

二ノ谷古窯跡発掘調査報告書

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I 調査に至る経緯	1
II 昭和4年の調査	2
III 環 境	2
IV 二ノ谷古窯跡の調査	3
1. 調査の経過	3
2. 遺 構	4
a) 窯体の構造	4
b) 灰原の範囲	7
c) 操業について	7
3. 遺 物	9
a) 陶 器	9
b) 窯道具類	12
小 結	12
V 考 察	15
二ノ谷古窯跡と地方窯の成立	15
VI 二ノ谷古窯跡雑感	21
VII まとめ	27

扉写真 昭和4年当時発掘状態

(武井岩雄氏提供)

挿 図 目 次

第 1 図	位 置 図	1
第 2 図	周辺環境図	3
第 3 図	地 形 図	4
第 4 図	窯体実測図	5
第 5 図	遺構全体図	7
第 6 図	各トレンチ土層堆積図	8
第 7 図	遺物実測図 1	10
第 8 図	遺物実測図 2	11
第 9 図	陶器形態分布図 1	13
第 10 図	陶器形態分布図 2	13
第 11 図	底部調整技法集成図	16
第 12 図	旗指古窯跡出土土器集成図	17

挿 表 目 次

第 1 表	出土陶器観察表	12
-------	---------	----

図 版 目 次

- 図 版 I 遺跡航空写真
- 図 版 II 1. 発掘区遠景 2. 完掘遠景 3. 発掘風景1 4. 発掘風景2
- 図 版 III 1. 窯体完掘状態 2. 窯体完掘状態近景
- 図 版 IV 1. 右側壁上方状態 2. 右側壁下方状態 3. 右側壁下方部分
- 図 版 V 1. 遺物出土状態1 2. 遺物出土状態3 3. 遺物出土状態3 4. 遺物出土状態4
- 図 版 VI 1. Aトレンチ土層堆積状態 2. Eトレンチ土層堆積状態
3. Dトレンチ土層堆積状態1 4. Dトレンチ土層堆積状態2
5. Bトレンチ土層堆積状態 6. Cトレンチ土層堆積状態
- 図 版 VII 窯体断ち割り状態
- 図 版 VIII 1. B-B'断面状態 2. C-C'断面状態 3. D-D'断面状態 4. E-E'断面状態
- 図 版 IX 遺物1 (出土土器)
- 図 版 X 遺物2 (天井架構材融着土器1)
- 図 版 XI 遺物3 (天井架構材融着土器2 重ね焼成状態 床面積融着状態)
- 図 版 XII 遺物4 (底部状態 皿山古窯跡採集土器底部)
- 図 版 XIII 遺物5 (底部状態 窯壁 窯道具)

二ノ谷古窯跡発掘調査報告書

I. 調査に至る経緯

二ノ谷古窯跡は静岡県小笠郡小笠町河東の今間に位置しており、小笠町でも南部の山中にあって、浜岡町に近接する。

本古窯跡は、昭和4年に発見され、『静岡県史』第2巻に紹介された周知の遺跡である。その際の出土遺物は、一部は地元の方々が所持し、また一部は地元高校郷土研究部の所蔵するところとなっていたが、現在は散失してしまい、現地での採集も困難であった。

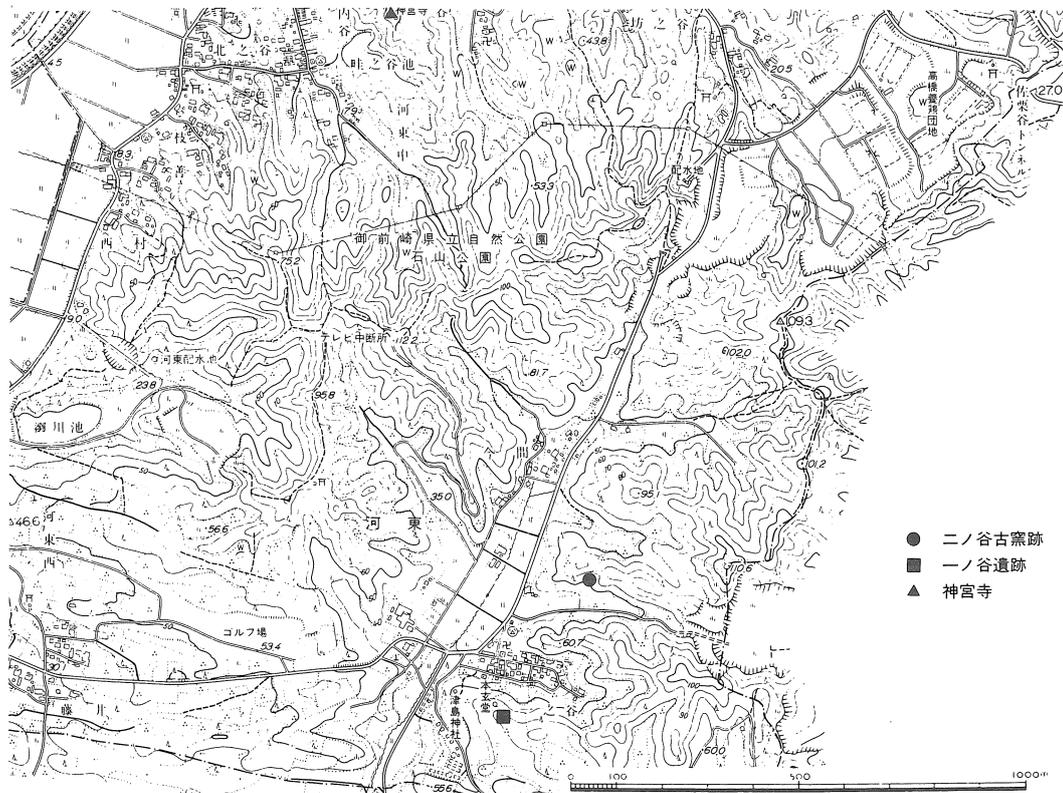
遺構は埋め戻された後、現地には茶が植えられて50年余の間保存されてきた。

しかし、昭和58年5月に、現在の地主である森氏は在来種の改植を計画し、この計画に対して森氏をはじめ地元有志の方々から、改植に先立つ事前調査の要望が町教育委員会に寄せられた。

町教育委員会は、この要望に対して県教育委員会と協議した結果、昭和59年度に国・県の補助金を得て、発掘調査を実施する事にし、実施計画を立案した。

実施時期については、一番茶の摘み採りを待ち調査を実施することにし、調査員には58年度池ヶ谷横穴群を調査した渡辺を依頼して、昭和59年9月3日に現地視察と打ち合わせを行ない、同年9月17日から現地調査を開始することにした。

尚、改植は人力で行なうとの地主の希望もあり、窯体周囲に調査区を限定して調査を実施した。



第1図 位置図

Ⅱ．昭和4年の調査

本古窯跡は、当時の地主であった井上茂一郎氏が昭和4年4月に、当地を開墾中に発見し、その時県史編纂委員であった鷲山恭平氏によって調査がなされて、県史第二巻50～53ページに報告されている。

以下にその要約をしてみたいと思うが、今回の発掘調査にあたっては、窯体の位置、規模や遺物の予測について、55年前の調査を実見した地元の方々の記憶のほか、この記録が参考になった。

1. 位置 「左右及び山頂は杉林なり。山脚と山頂との間にて窯址は中央より稍上部に存す。」とあり、付図・写真図版と共に大概の位置を知ることができた。
2. 窯跡 窯の年代は不詳としながらも、本窯跡が自然の傾斜を利用した登り窯で、「左右の両壁に熔岩の如きもの表われ」とし、窯壁がガラス溶融している事を物語っている。
3. 規模 「幅員三尺長さ約二間一尺、下より四尺位にして一階段をなしたる如し。」と窯体の規模が幅1m、長さ4m程であることがわかる。
また「両壁は高二尺に過ぎざれども」とし、表土の流出や移動が壁の残存に関与していると示唆を与えている。
5. 遺物 「窯内及附近」から土器片が出土し、土器には「皿形のもの多く、(甲) 径三寸一分、丈一寸二分、(乙) 径五寸、丈一寸五分の二種類、素焼にして糸底を有す。」との記載から、小碗と大碗の二種を本窯跡で焼成し、しかもそれらが無釉であることが判る。

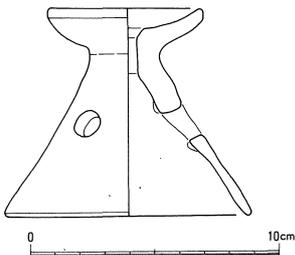
以上の内容は、今回調査を終了して振り返ってみると、窯体の規模、残存状況の観察や遺物の記述等、その確かさに驚かされる。さらに付言するならば、当時の発掘の正確さと保存措置の周到さである。

第一に床面は全く手が加えられていなかった。その調査は第2焼成面にとどまっており、初回焼成の床面土器は完存していた。ただ左側壁と燃焼室は、調査後の茶の木植え付けでその一部が破壊されていた。第二に調査終了後、窯体内は地山土でしっかりと充填され、右側壁を保護していた。しかもその埋土には土器片、壁体片等をほとんど含んでいなかった。こうした文化財に対する着実な保存と愛護がなされていたからこそ、55年を経た再調査を可能にした事を忘れてはなるまい。県史に載せられた写真図版と同じ窯体の姿をみた時、過去の人間の努力と熱意に頭のさがる思いがした。

今回の調査では、地主森氏の意向もあり、極力調査範囲を押えることができた。また苗木の植え付けも人力で行なうとのことである。過去は努力して継承してゆかなくてはならないのである。

Ⅲ．環 境

二ノ谷古窯跡は今間地区の山中にある。周囲の山塊は方射状に細く延び、複雑に開折されて、狭い平坦地が深くはいりこんでいる。近年、地山を構成する礫層が建築資材として注目され、遺跡の周囲は急速に砂礫の採取が行なわれるようになってきたが、この礫層の上面には風化凝灰岩層が形成され、丘陵の頂部付近には、小笠山塊と同質な陶土に適する土壤がみられる。事実、本古窯跡の反対側斜面（北側頂部近く）には、近年まで使われた採土場の跡がある。恐らく本古窯跡で用いられた陶土もこれであったと想像している。



周囲の遺跡は、分布調査が遅れていて、明確ではないが、今回の調査で新たに一ノ谷遺跡を確認した。集落の南側に延びる丘陵の西端に位置し、津島神社の東側上方に占地している。給水塔の建設に際して、弥生時代後期菊川式土器の破片が出土し、地元の方によって採集、保管されている。現在でも遺物の散布が確認できるが、茶畑となっていて、遺跡の範囲は明確になし難い。また左に示した古墳時代初頭の器台は、高橋B遺跡から出土しており、

本遺跡から北へ続く道路が坊ノ谷を経て主要地方道掛川一浜岡線と交わる一丁田付近に遺跡は広がっている。同遺跡は高橋川が形成した河岸段丘上であり、6世紀前半代の須恵器杯身が採集されている。さきに述べた一ノ谷遺跡と共に、当地域の山塊部、平野部共々弥生時代末～古墳時代初頭には生活の舞台であったことが判る。

平安時代の末期、本古窯跡が営まれた頃の遺跡ははっきりしていないが、本書「V、考察」で触れているように御厨関係の地名が残っている。

本遺跡の北1.2kmの河東中には神宮寺がある。また本遺跡の東北1.4kmほどの地には「佐栗谷」の地名が残っている。「神鳳抄」には遠江所在の御厨として「佐久目御厨」を載せているが、「県史」ではこれを引佐郡東濱村佐久米に比定している。比定の可否を言及する資料はないが、ここでは伊勢神宮と関わりをもつ歴史環境に注目したい。



第2図 周辺環境図

IV. 二ノ谷古窯跡の調査

1. 調査の経過 調査は窯体箇所のア地点、作業場を想定した山頂のB地点を対象とした。

昭和59年9月3日に二ノ谷古窯跡の発掘調査に関する打ち合わせと現地視察を行ない、同年9月17日から現地調査を開始し、またそれまでの間にトレンチ設定箇所の茶の木在来種の抜根を、地主、森氏の手で行なうことにした。

9月17日 窯体の位置確認と遺構面の残存状態をみるためトレンチを設定し、遺跡遠景写真を撮影。

18日 A・B・Cの3トレンチの排土作業を開始し、Bトレンチにて旧表土面を認める。

19日 各トレンチの排土を終了、Aトレンチにて灰原の残存を確認する。

20日 降雨のため現地作業を断続的に行なう。地形測量に向けて杭打ちを行ない、各杭の距離と海拔値を求める。発掘区を設定する。尚、地主の意向により、発掘区は窯体周辺に限定し、その部分の改植に押えることにした。

21～24日 発掘区内の抜根と測量範囲の周囲の雑木を伐採する。24日には発掘内の排土に着手。

25日 窯体プランを確認。窯体前庭部の調査を進める。

26日 排土作業と併行して、地形測量を行なう。各トレンチの写真撮影を実施。Cトレンチについて地山面までの排土を行ない、この地点まで製品が転落している事を確認する。

また灰原範囲と工房跡を把握するために、D・Eトレンチを設定し排土に着手する。

27日 地形測量を終了する。Dトレンチで灰原を確認し、またEトレンチまでは灰原が及んでいない事を確認する。

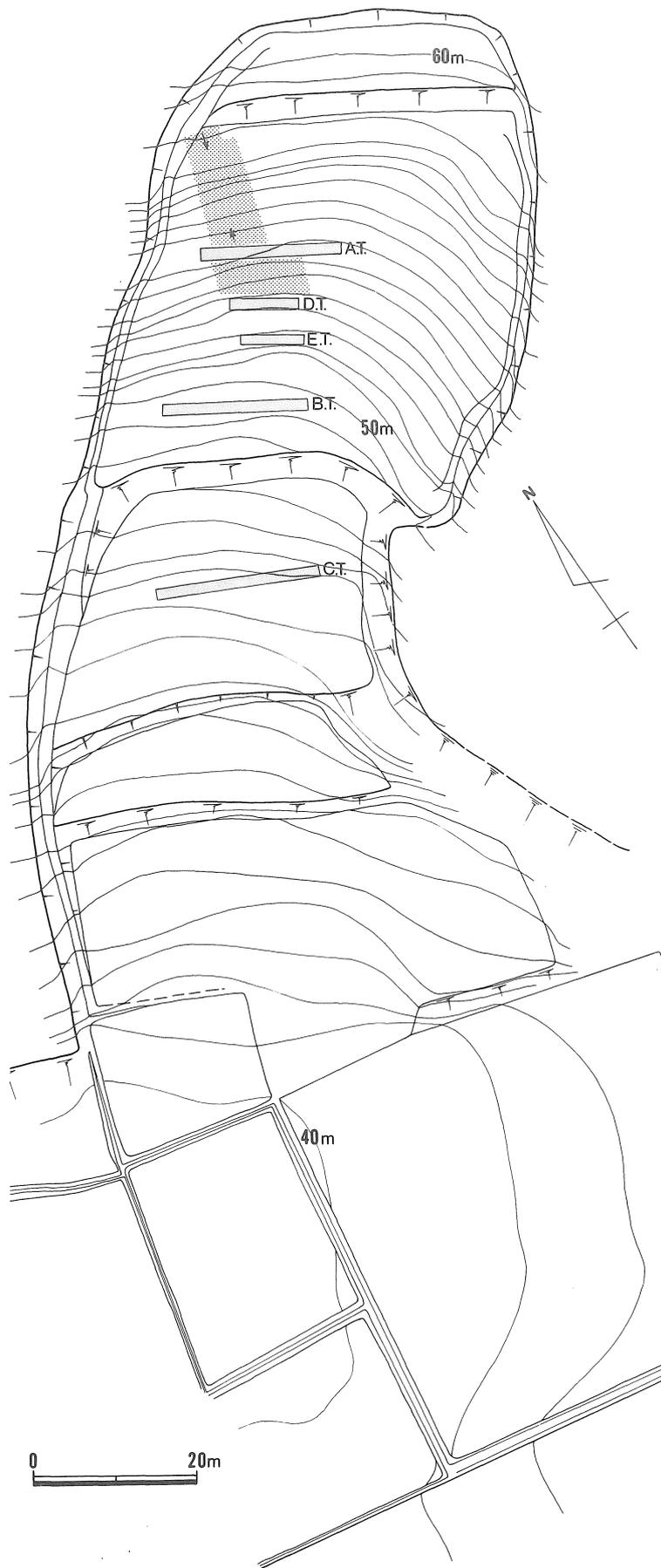
28日 A・Cトレンチを実測。窯体内排土。A・Cトレンチを埋め戻す。

29日 窯体C-C'の土層堆積状態を実測し、セクション帯を外す。発掘区排土を終了する。

30日 現地作業を休む。

10月1日 窯体の完掘写真撮影。灰原縦断面図を作製する。

2日 発掘区の遠景写真撮影。窯体実測に着手する。



第3図 地形図

- 4日 窯体精査、実測作業を続行。
- 5日 窯体床面を精査。B地点の地形測量を行なう。
- 6日 窯体断ち割り作業、断面実測作業を行なう。
- 7日 午前中、現地作業を中止し、遺物水洗。午後にB地点の排土埋め戻しを行なう。
- 8日 窯体断ち割り作業、断面実測作業を続行。
- 9日 遺物整理作業を行なう。
- 10日 窯体断ち割り作業を終了。
全ての実測作業を終了する。
- 11日 発掘区埋め戻し作業を行なう。
- 12日 現地作業を全て完了し、器材の撤去を行なう。

以上のように、現地調査には延べ25日を要した。期間中には、多くの方の来跡を得て、貴重な御教示、御指導をいただいた。また地元の調査参加者、見学者と町教育委員会をはじめ町関係当局には、ひとかたならぬ理解と協力をうけた。

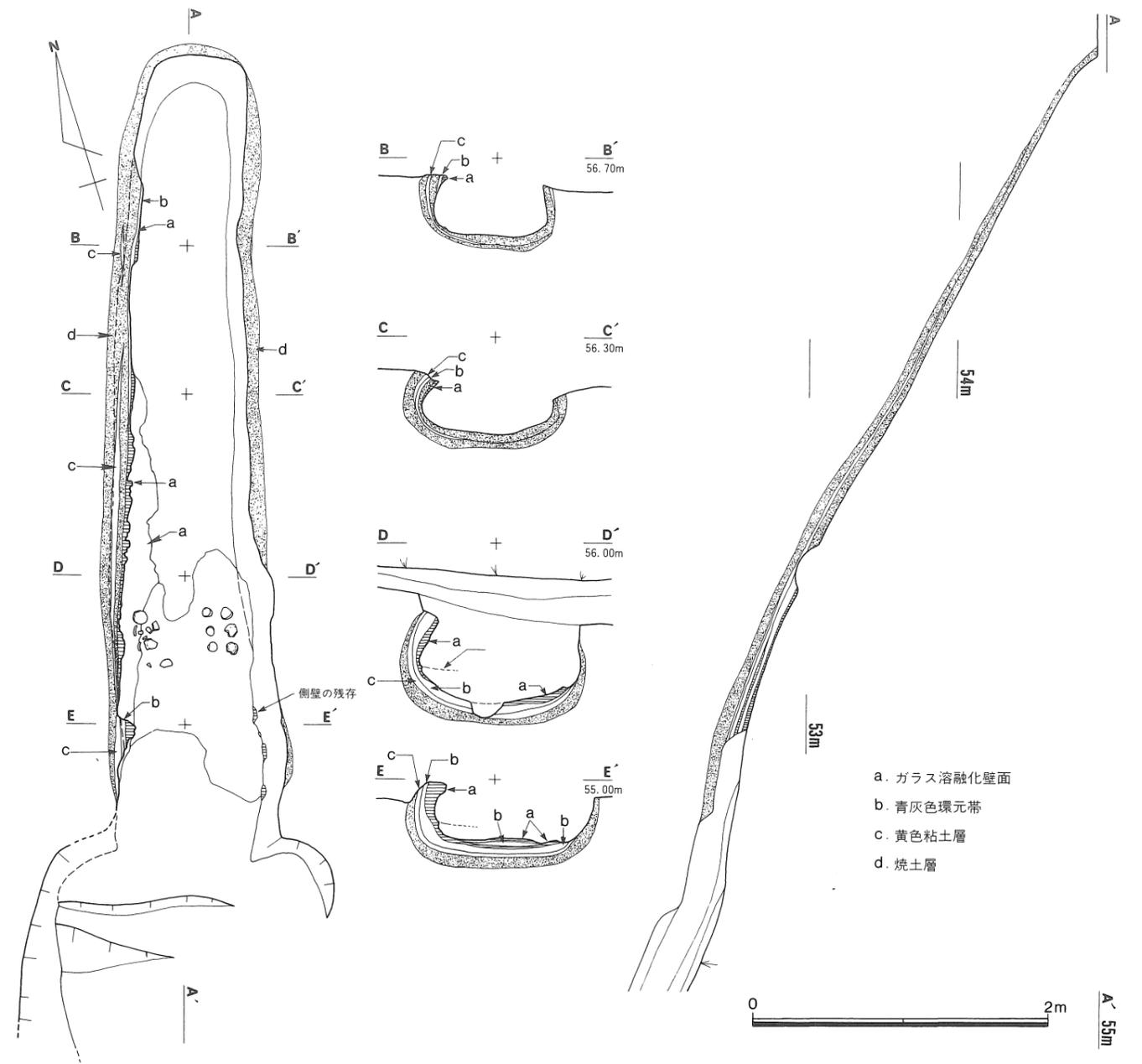
2. 遺構

a) 窯体の構造 窯体は無階無段の半地下式窯である。煙出しを含めて地上部分は良好に残存していた。

残存長は焚き口の有段部から5.85 mを測り、焚き口部側で幅1.20 m、煙突部側で幅0.60 mを測る。また前提部の残存は特に不良であったが、幅約1.8 mを測ることができる。主軸はN 17°E。

床面傾斜は約30°を測り、窯体のほぼ中央部で焚口にかけて緩かになる。

焚口で高さ15 cmほどの段差をつかって焼成室と前庭部を区画するが、前庭部は数段の階段を設けていたと考えられる。



第4図 窯体実測図

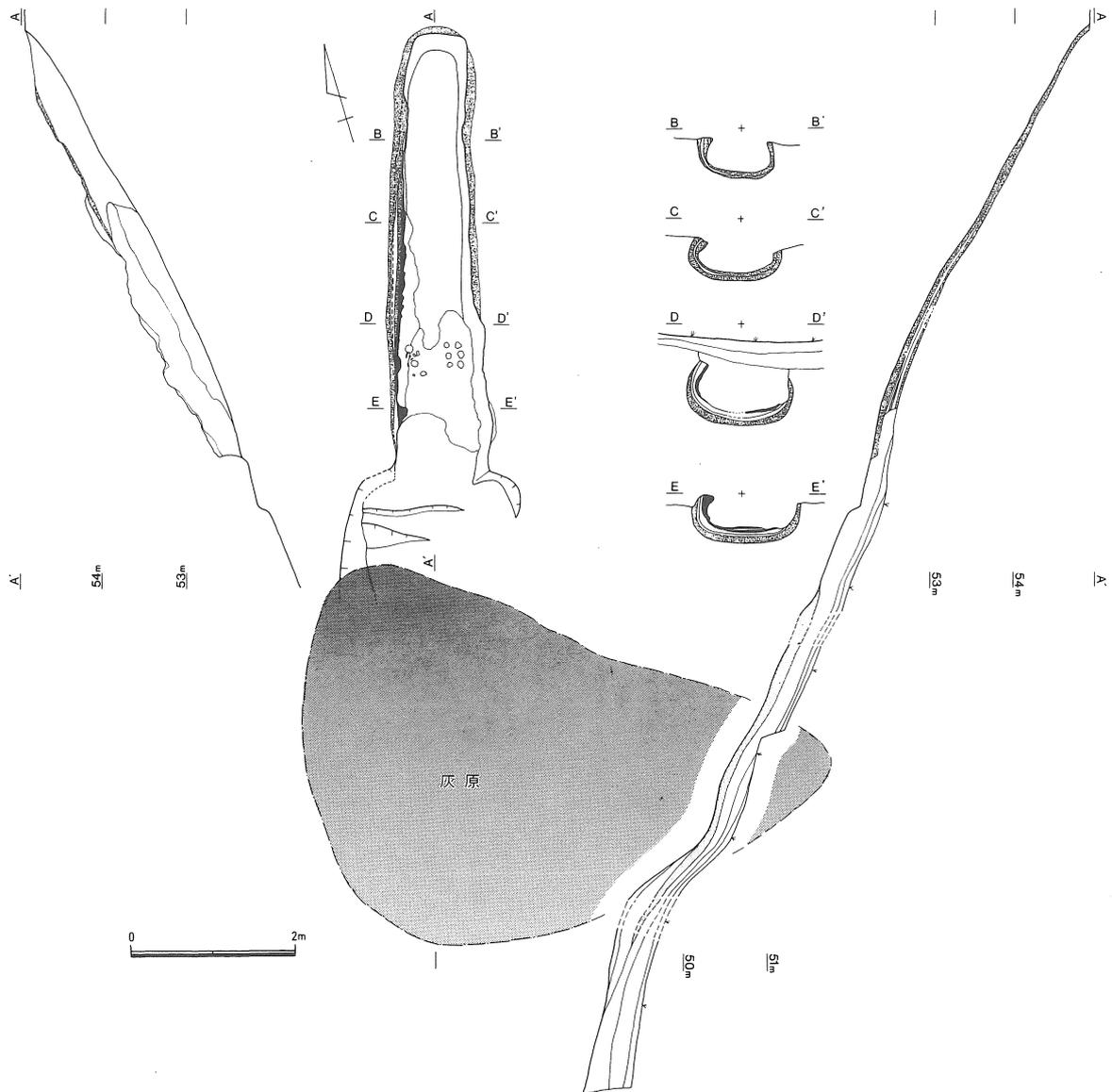
土している。固定式か移動式かをにわかに判断し難く、分焰柱については不明としておきたい。

b) 灰原の範囲 灰原は南北4.5m、東西6.3mの略三角形を呈している。東に偏在して広がっているが、これは地形に左右されての事柄と思われる。また縦断面に示したように、その中程で地山は約1mにも及ぶ段差を有していて、灰原はこの段が幾分埋まった後で形成されているのが分かる。

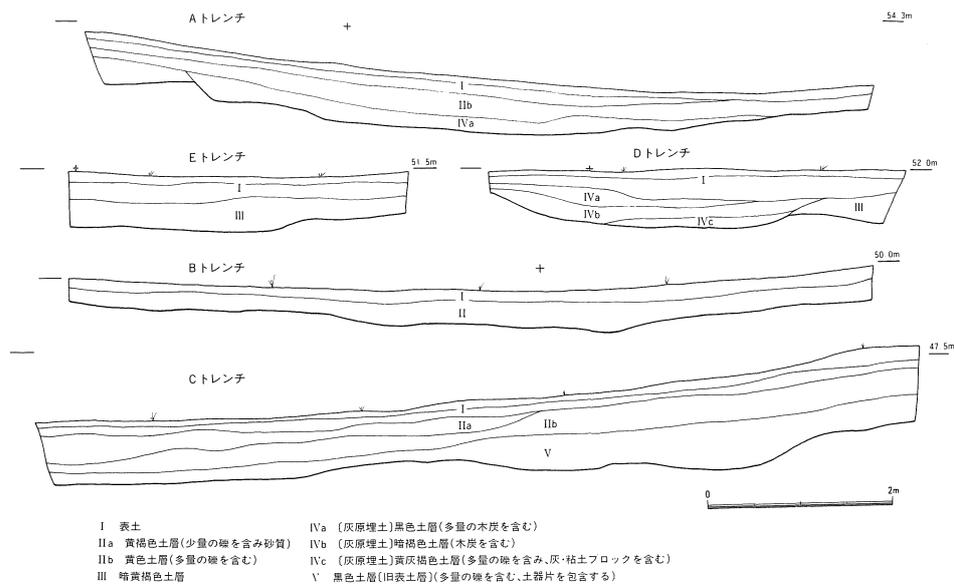
灰原埋土は木炭粒を多量に含む軟質の黒色土であったが、この土層中に遺物の大多数が含まれていた。また窯体下方のCトレンチからも灰原を構成する土砂が観察され、遺物も転落していて、灰原が流出している状況を確認することができた。

c) 操業について 窯体を断ち割り、その補修から最小限2度にわたる操業が認められた。この2度という回数は、床面の貼り変えの回数であり、補修を実施することなく操業したとも考えて、これを最小限と表記した。この補修は特に燃烧室の下方で顕著であり、また上方は昭和4年の発掘によって床面が攪乱されている事も手伝って明瞭な残存を止めていなかった。

第2次焼成面はガラス化した西側壁に連続する、暗灰色に還元されて硬化した床面で焼台等の遺物は残存していなかった。第4図E-E'でみると、下方の第1次焼成面の間に青灰色の還元帯を認めるこ



第5図 遺構全体図



第6図 各トレンチ土層堆積図

態が異なり、しかも爪痕が底部外面に残り、恐らく製作当初から焼成位置が決定されていたものと考えられる。

各横断面図でみるように、内側から外側に向って、a. ガラス化した壁面→b. 青灰色還元帯→c. 黄色粘土帯→d. 焼土帯の4つの帯状に変化した土層を観察することができる。本来の壁面は如何なる土で被われていたかは分からないが、aの部分では乳棒状に垂下した部分が見られて、極めて耐火度の低い粘土であったことが判る。また焼成の還元雰囲気の中でこの壁面架構材が還元された部分がbであり、この還元が及ばなかった部分がdであり、cは焼成時には強熱で酸化され赤色変化を生じたものの窯体が還元されるに従って酸化部分が還元されて赤化が変化して黄色となった部分であると理解できる。

こうしたサイクルを手掛りにして、2面の床面と1回の補修を認めることができるが、第4図E-E'に破線で示した西側壁面の突出は、あるいは最も新期の床面の存在を示しているとも考えられる。しかしながら、この他に床面の存在を示唆する根拠はなく、断定するのを避けておこうと思う。

以上の遺構に関して付言すれば、窯体の規模は島田市旗指古窯跡第20号窯跡(最大長約5m、焼成室幅0.75m、勾配約20°)と近似している点を指摘しておきたいと思う。また大須賀町白山古窯跡の中にはこの規模の窯跡はみられない、後述する工人の系譜を考える上で参考になろう。

とができ補修も簡単なものであった。

第1次焼成面の燃焼室でも下方の焚き口近くに、馬爪形焼台を伴う坏が床面に融着して検出された。

これらは等間隔に並べられ、東半部では2列6点が残存していた。後述するように、この最下部の坩は出土した小坩とは形

3. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、大部分が陶器で占められたが、それらは大塚と小塚の2種類に器種が限られ、およそポリコンテナ2箱分の出土量であった。また呪具としての陽物及び分焰柱の一部がそれぞれ1点出土している。尚、陶器は全て無釉で、しかも灰釉陶器の器形を残している事からその最終末期に位置すると思う。

a) 陶器〔第7図、第8図に実測図を、第1表に観察表を示した〕

大塚とした陶器は口径14～16cm、器高5～6cmほどを測る塚で、高台の作りも丁寧で入念な仕上げが観察される。また体部形状に大きく2種類を認めることができる。

小塚とした陶器は口径10cm以下、器高が3～4cmほどを測る塚で、高台の作りは粗雑で、形態は台形を呈しほぼ一定している。またこの小塚の体部形態もその中央から下部に屈曲部を有し、体部上半は外反^{*1}して、体部の形態もほぼ一定していると言えよう。

以上に対し、器形を異にし、器形と法量を相異させる一群の陶器がある。しかしこれらを中塚とは呼ばず小塚に含めておいたが、それは法量が小塚に近接し、また重ね焼きの最上部と最下部に置かれて、謂わば「捨て」を当初から意図された特殊な塚であるからであり、小塚の一変形と理解するからである。

大塚(第7図1～9)は口縁部を外反させ、丸くつくる体部を有することで一致しているが、「ハ」の字に外へ強く張る断面三角形に近い高台は、渋谷昌彦氏の分類に従えば「高台接合部より底部先端部が外側」となるもので、高台内面を強くナデて内湾させるものである点でも7を除いて一致している。7は「高台接合部のほぼ真下に底部先端部がくる」もので、むしろ小塚の高台形態に近い。^{*2}

また口径：器高をみると、比較的浅いもの(大塚B)と深いもの(大塚A)の2種類がみえる。

既に遺構の項で触れたように、新旧2度にわたる床面の貼りかえから、少なくとも塚にも2時期が想定できるが、時期差を認めるだけの根拠はみえないと言えよう。

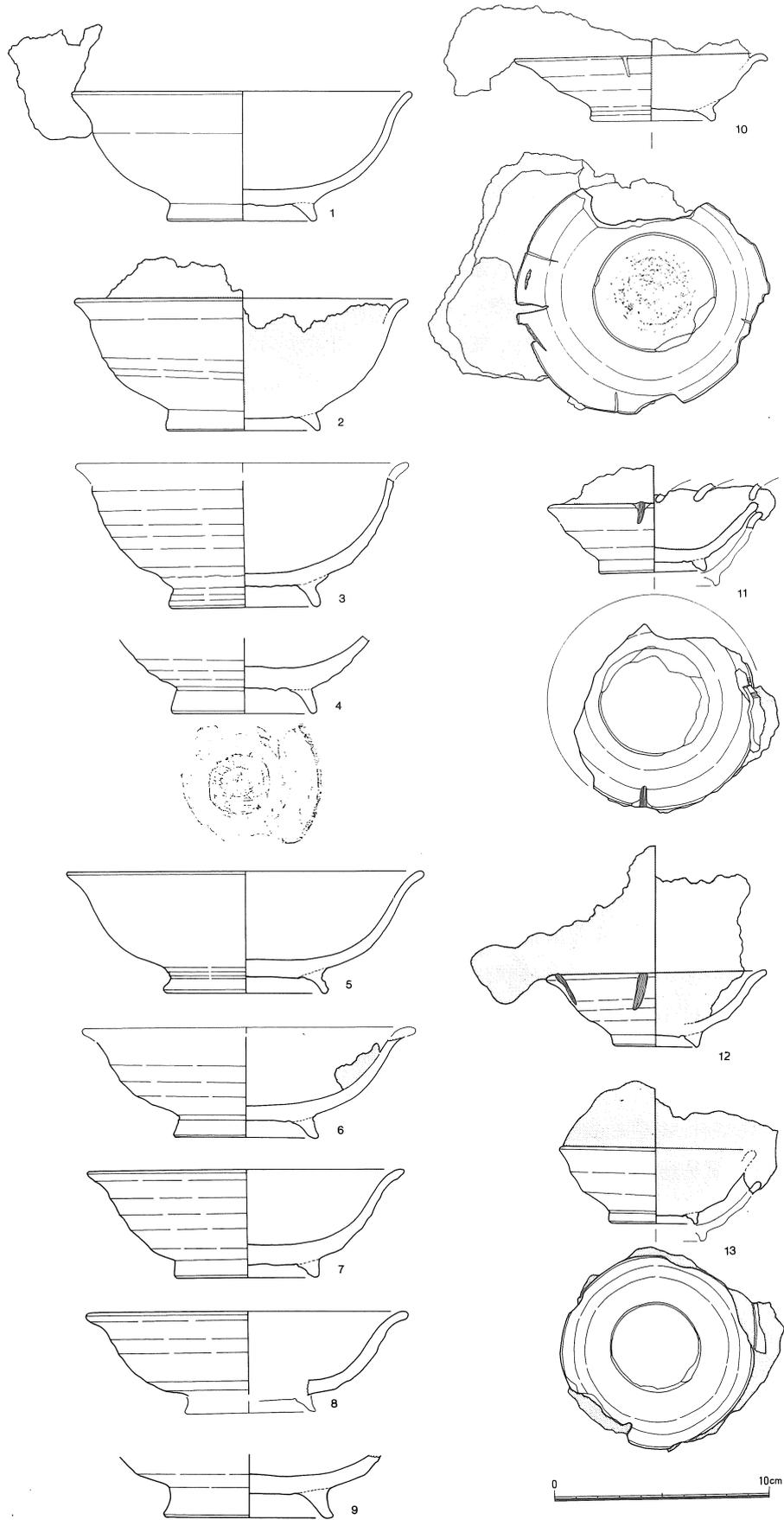
小塚(第7図10～13、第8図14～32)は、口縁部を外反させ、体部中程に程度の差こそあれ稜をもち、断面三角形の高台をもっていることで一致した形態をとる。しかしさらに細かく観察すると、形態にわずかな差異を有しているのが判る。10.11.16.(小塚B)は直線的に立ちあがる体部を有し、他の小塚と区別できる。また10～16は天井架構材が焼成中に崩落して融着したものであるが、この融着した天井材は、その上面が滑らかで、かつ乳棒状に垂下したものもみえ、崩落後その上面を焰が通過したことを物語っている。さらに10.11.12.は輪花塚であり、10はへら状工具で、11.12はハケ状工具あるいは布や皮革で輪花を施している。以上の特徴から推して、形態が異なり、輪化を施した小塚は、製作当初から「捨て」を意識して作られて、翻って輪花も呪術(祈り)の一環として施されたと想像できる。

こうした商品を捨象した陶器に32～34の小塚がある。これは新期の床面に埋め込まれたもの(34)と床面傾斜に対して水平度を確保するために、馬爪形高台で支えられた最下面の塚である。中でも形態がわかる35(小塚C)は比較的口径が大きく、明瞭に屈曲する体部をもたない点で他の小塚とは形態を異にしている。また17は36に接着していたが、17には爪痕が残り注目される。塚に爪痕が残るものは少ないが、上述の意図を始めからもっていた塚には爪痕がある点も留意する必要がある。

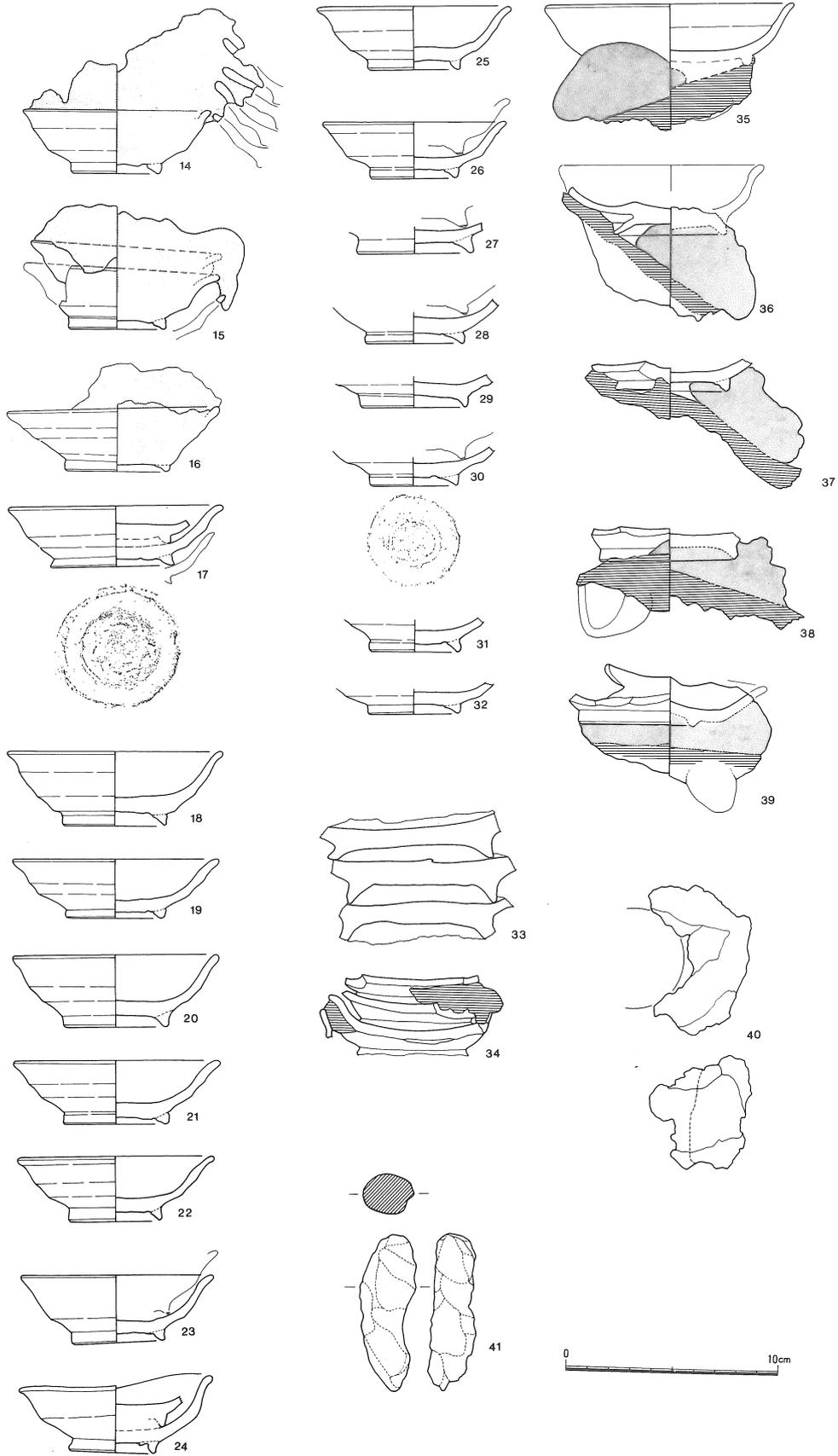
さて、こうした小塚をさらに特色づける技法に、高台下面の研磨がある。これは自然釉による陶器相互の接着防止を目的とするが、また接着した場合にタガネによる剝離を容易にする目的で施されると考えられる。従って自然釉の性質、換言すれば焼料の性質を熟知した上での技法・形態と言えよう。

* 1. VI、「二ノ谷古窯趾雑感」で、田中貢先生は工人の分業と彼等の生活について、興味深い指摘をしておられる。先生には陶芸作家の眼からみた数々の有益な御教示をいただき、厚くお礼申しあげる次第である。

* 2 渋谷昌彦ほか『旗指古窯跡発掘調査報告書』島田市教育委員会 1983 P.49～52。



第7図 遺物実測図1



第8図 遺物実測図2

第1表 出土陶器観察表

分類	遺物No.	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
大塚A	1~4	口径 14.0~15.6 器高 6.0~6.2 高台径 7.0~7.1	器高が比較的高く、口縁部を外反させ、球形に近い体部を有し、外傾する高台を付す。	内面を丁寧になで仕上げして、外面には微弱なノタ目を残す。2には体部下半に弱い回転ヘラケズリを認める。底部に片手引き静止糸切り痕を残す。	胎土は共に緻密で、焼成も良好。色調は灰白色。共通して<円環状押え>をみる。1、2には天井架構材融着。
大塚B	5~9	口径 14.8~(16.4) 器高5.0~5.7 高台径 6.8~7.3	器高が比較的低く、口縁部をゆるやかに外反させ、5、6、9には外傾する高台を付す。7には直立する高台を付す。	5は特に内外面を丁寧にナデ仕上げするが、他は内面を丁寧にナデ仕上げする。8には回転ヘラケズリ痕をみる。片手引き静止糸切り。	5は暗灰色を呈するが、他は灰白色を呈し、胎土は緻密で、焼成も良好。共通して<円環状押え>を観察する。6には天井架構材融着。
小塚A	12~15 17~26	口径 8.8~10.6 器高 2.9~3.8 高台径 3.9~5.0	体部大半に強い稜を有し、体部上半から口縁部を外反させる。直立気味の三角形高台を付す。	外面の稜は内面に些程影響しておらず、内面は丁寧にナデ仕上げされる。片手引き静止糸切り痕を残す。ただし底部外面をナデ調整するものが多い。	胎土は緻密で、焼成も大変良い。色調は灰白色。17は暗褐色を呈する。20を除いて<円環状押え>がみえる。12~15は天井架構材融着。17は2次焼成時床面に塗り込まれている。また、全てに共通して重ね焼成痕を有するものが多い。17には爪痕が残り、12は輪花碗。
小塚B	10~11 16	口径 9.7~11.7 器高 3.0~3.2 高台径 4.8~5.5	体部は直線的に外傾し、小塚Aのように稜をもたない。10は口縁端部を強く外反させ、11、16はこれが弱い。16の底面は平坦である。共に三角形の高台を付すが、10は外傾する。	底部外面には片手引き静止糸切り痕を残すが、糸切り後丁寧にナデ調整される。	共に胎土は緻密で、焼成も良好である。色調は灰白色を呈する。共通して<円環状押え>を施す。10、11は輪花碗。共に天井架構材が融着する。
小塚C	35	口径 (11.6) 器高 — 高台径 —	ゆるやかに内湾する体部を有し、わずかに外反する口縁部をもつ。	内外面共丁寧にナデ調整される。	胎土は緻密、焼成は良好で、暗褐色を呈する。ガラス化した馬爪高台を伴ない、17が上部に乗る。

b) 窯道具類〔第8図40、41〕

陽物(41)は粘土塊を片手で握っただけの簡単な作りで、暗灰色を呈する。このような遺物と窯業の結びつきは深く、旗指窯跡では16点が出土していて、窯体内からの出土例が4例、陶器溜から5例、灰原から3例が出土している。特に注目すべきは陶器溜めからの出土で、この陶器溜めは上面が密閉されまた窯に付属する灰原が存在している事から、これを最初期焼成品に対する配慮から生まれた廃棄ピットと考えてみた。すると陶器溜めから出土した陽物は、試し焼き段階の祭祀に使用されたと考えられる。

また大須賀町四番山窯跡からも出土しており、こうした祭祀はむしろ一般的であると言えよう。窯業生産におけるどう言う種類の祈祷に関わる呪具かは知る由もないが、豊穰儀礼の一例であろうか。

分焰柱の一部と考えた破片(40)は、内径が3cm程で、暗褐色に強く焼結しており、若干焼け過ぎていて、軽くなっている点が気に掛るが、ここでは分焰柱と考えてみた。しかし遺構ではこの痕跡を把むことができなかった。

小結 今回出土した陶器は碗のみであった。またこれらの陶器の器形は旗指窯製品に酷似している。旗指窯では20号窯以降山茶碗に至るまで碗以外の器形をほとんど焼成しなくなるという傾向をもっているが、本古窯跡は、考察で述べるように旗指窯からの工人の直接移動が想定され、従ってこの傾向の延長にあると言えよう。またこの頃の陶器、土師器を含めた土器全般には、内面調査の丁寧さが顕著となる傾向が認められるのである。実は同時代の需要と無関係に本古窯跡を含めた陶器生産が存在するはずはなく、即ち、この内面重視の傾向は専ら上から内面をのぞき込むように器を用いた事と、水漏れの問題が大きく関与していると思われ、それは陶器がより安価で、実生活に密着したものになった結果であろうか。

* 1 市原寿文ほか『清ヶ谷古窯跡群白山窯跡』大須賀町教育委員会 1979

次に、上述した陶器の概観に沿って、旗指古窯跡と本古窯跡の製品をさらに細かく比較して、両者の位置づけを行ってみたいと思う。

そこで、従来は主観的かつ直観的に把握されてきた「器形」をできるだけ客観的に数値化した上で、検討に備えることにし、また大塚、小塚の法量差を捨象し、同一地平での比較を行うことにしたいと思う。即ち、「くびれ」とか「外反」等の形態上の差をひとまず置いて、器形を口径、高台径、器高の百分比を求めて、それぞれの諸要素を三角ダイアグラムに表現して検討することにした。

第9図は旗指窯と本古窯跡の製品の形態を百分比化して示した分布図であり、第10図はこれをまとめたものである。両図から次のような特色を窺うことができよう。

1) 両古窯跡の塚の形態は口径：

高台径：器高が5～6：2～3：1～3の比率の中に納まってしまい、非常に近似した形態をとっている。

2) しかし、より詳細に眺めてみると、旗指17号窯跡の塚は

非常によくまとまった分布を示している。また17号窯跡の製品と20号窯跡のそれは相補的な分布を示し、そこには器高の低下と高台径の増加が見

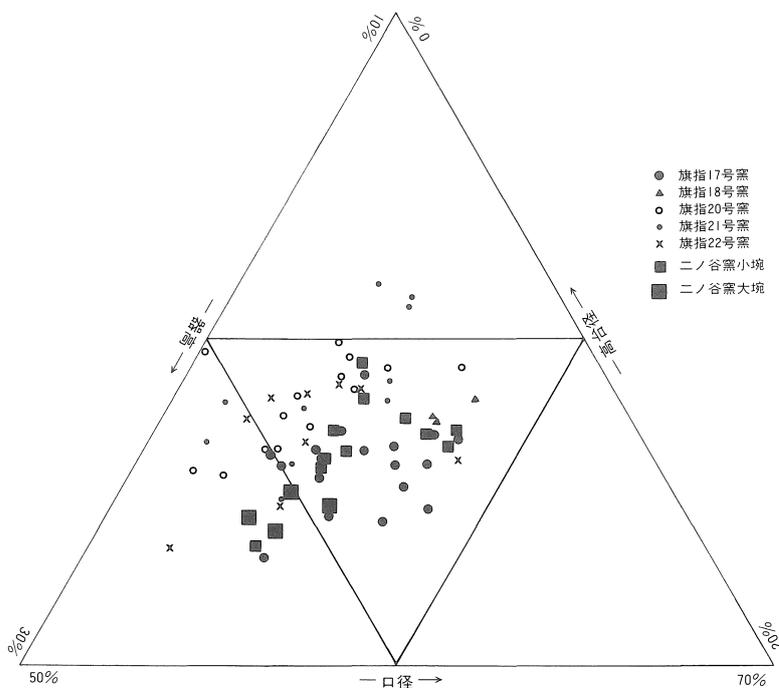
てとれる。さらに旗指21号窯の製品は20号のそれに比べて形態バラツキが見えるが、20号窯跡の製品と形態はほぼ重なっている。

3) 以上の旗指窯の製品に対して、二ノ谷古窯跡の製品は、むしろ17号窯跡の製品と形態を類似させている。

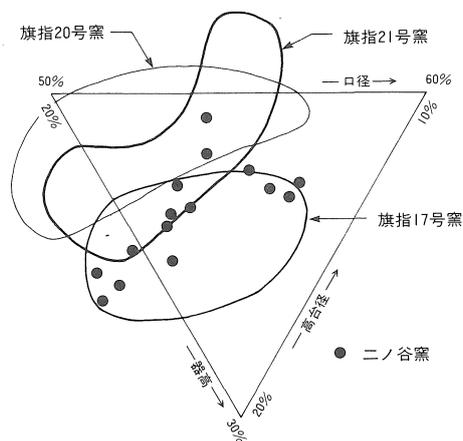
このような特色は、最初にも断ったように、法量を基礎とするものではない。従って何よりもまず二ノ谷古窯跡の製品は、小塚の法量が旗指窯のそれよりもかなり小さく、また山茶塚への移行形をより端的に示しており、従って旗指窯よりも後出するであろうことをまず念頭に置く必要がある。また報文に依れば、17号は21号、20号よりも古い段階に位置づけられており、形態差が即年代差とならないであろう事は言をまたない。

しかしながら、2) でみたように、17号窯跡と20、21号窯跡の塚とは明らかに形態を異にする一群である点は留意しなくてはならないであろう。勿論、旗指窯の中で同時に複数の窯が煙を昇らせていたとすることが可能であるならば、これは工人の相異を示すことになり、さらに二ノ谷古窯跡への工人の移動は17号窯跡からのものであったと考えることができるはずであろう。

これに対し、17号から20、21号への系列を想定するならば、そこには陶器の規格を変える必要が存在したのであり、二ノ谷古窯への移動に際してもさらに規格を変化させる必要が生じたと考えなくてはな



第9図 陶器形態分布図1



第10図 陶器形態分布図2

らないであろう。これはどうも不合理と言わざるを得ない。なぜならば、それらの変化の方向性が不定だからである。それよりも、各工人達が継承してきた形態感覚は、それが設計図にはよらない直接手で製品を作りながら伝習したものであり、これが形態の百分化に実現していると考えの方がより理屈にあっていると言えるのではなかろうか。確かに形態のダイアグラムをみれば、こうした規格性は年代を追って崩れてゆくものようである。また17号窯跡の工人も直接二ノ谷へ移動したのではなく、あるいは旗指窯の中で別の窯を営んでから移動したのかも知れない。しかし、旗指窯の全容を検討していない現在断定を避けなくてはならないが、旗指窯を構成する複数工人集団の存在と、その一分派である17号窯跡の工人集団からの二ノ谷古窯跡への移動は想像できるであろう。

古式土師器の壺と甕を使ってこうした土器形態の相異を製作集団の相異に求めた試論を以前に公表したことがある。また瓦の製作技法に注目して工人集団を分析した平野吾郎氏の論考もある。問題は歴史^{*1}の内在論的な課題を、土器のどこに焦点を当てて探るかという方法論の構築にある^{*2}と言えよう。

二ノ谷古窯跡での陶器生産は短期間であり、かつ小規模であった。

またその年代は旗指古窯跡の末期、恐らく11世紀後半代に位置づけることができよう。

* 1 渡辺康弘「土器の設計試論」『沼津歴史民俗資料館紀要』8 1984

* 2 平野吾郎ほか『竹林寺廃寺跡』島田市教育委員会 1980

V. 考察 二ノ谷古窯跡と地方窯の成立

1. 史的環境

二ノ谷古窯跡をめぐっては、前に見たように御厨関係の地名が注目できる。

本古窯跡東方の浜岡町に接するあたりには「佐栗谷」という地名がある。これを「佐厨」と解釈すれば、例えば「神鳳鈔」記載の「佐久目御厨」をこれにあてることもできようか。ただしこの比定が困難であるとしても、「神鳳鈔」記載の御厨がその全てを網羅していない事は、西垣晴次^{*1}氏の説くところであり、本古窯跡の成立が御厨の影響下にあったのではなかろうかという視点も一考の価値があろう。

^{*2} また、これも前に注意を促しておいたように、現在河東の地には神宮寺があって、これはかつて一ノ谷の地に置かれていたとされ、特にこれを傍証に、この地域が神領と関わりが深いと推察される。

他に『県史』におけるように、神明社との関係にも注意を払うべきであるが、この地にその存在、伝承等は確認できていない。以上のように、御厨の設置を直接証拠だてる史料は皆無であるが、本古窯跡が経営されていた11世紀後半にあって、当地域と伊勢神社との関わりにまず着目しておきたいと思う。

次にこの時期の周辺古窯跡について通覧すると、島田市旗指古窯跡については、その報文で大塚勲氏が触れておられるように、隣接する大津地区が駿河国志太郡内大津御厨に比定されていて、やはり窯経営と神宮との関係を窺うことができるであろう。ただし、渋谷昌彦氏が注意を払われているように、また後述するように、特に千葉山智満寺との関わりも見逃すことができないのである。いずれにしても、旗指窯成立の背景には、かなり強大な力が働いていたと想像できる。^{*5}

さらに大須賀町清ヶ谷古窯跡群は、東遠江の地域でも有数な大窯跡である。ここは国衛窯としての性格が重視されているが、その根拠とされる遠江国分寺への瓦供給についても、瓦生産の実態が不詳であり、即ちそこには請負生産も考慮しなくてはならないであろう。平安時代末にあって引き続き国衛窯として存在していたかどうかは今後十分に検討すべきである。いずれにしても、清ヶ谷窯にあってはその経営が神宮の影響下にあったとすることはできまい。この時期の経営主体の複雑さがみえるようである。

角度を変えてこの二古窯跡をみると、清ヶ谷窯跡群内では、10世紀代に比定できる資料の存在がはっきりしないものの、8世紀から連続する土器生産が行われていたようである。また11世紀代に属する窯での陶器生産が質・量共に大規模化する点は特に留意すべきである。他方、旗指古窯跡では10世紀までの生産は全く行われていないのである。前者の謂わば「継続型」の生産に対し、後者の「成立型」の生産は区別すべきであろう。付言すれば、「継続型」の窯跡には藤枝市助宗・葉梨古窯跡群があり、「成立型」の窯跡には菊川町皿山古窯跡群、金谷町釜ヶ谷古窯跡や本古窯跡がある。

しかし、両者のいずれにおいても、生産の拡大・縮少の波を被っており、周辺古窯跡の成立もこの波と無関係ではないであろう。即ち同一傘下にあった工人の移動を、土器の製作技法の類似にみることができると考えられる。また「マツリ」の類似性にも窺うことができると思う。こうした工人の系譜関係

* 1 『群書類従』第1巻所載の『神鳳鈔』には「佐久目御厨」とある。また『県史』第2巻では「佐久目御厨」を引佐郡東濱村佐久米を比定しており、これに従えば、この私見は成立しないと言えよう。

* 2 西垣晴次「中世神宮領の構造」『和歌森太郎先生還暦記念論集』弘文堂 1976

* 3 一ノ谷の竹沢氏宅向いにかけて祀られていたと聞く。

* 4 渋谷昌彦、大塚勲ほか『旗指古窯跡発掘調査報告書』島田市教育委員会 1983

* 5 渋谷昌彦『千葉山智満寺発掘調査報告書』島田教育委員会 1984

から窯跡の成立を検討した上で、成立の社会的要因について言及することができるであろう。

勿論、前述のように傍証からでしかないが、平安時代後半の窯業生産跡の一部には神宮の影響下で成立し、御厨が主導した遺跡の存在が想起される。以下においては、こうした形態の窯業生産について試論を展開したいと思う。

2. 工人の系譜関係

始めに底部外面の調整技法に着目して、諸窯跡間の系譜を眺めてみよう。

本古窯跡出土の碗は全て有高台碗であったが、この高台の接合方法と整形技法には次の特色が観察された。それらは既に実測図にも示したが、ここでは第11図を用意して検討を加えたいと思う。

1. 高台内側には、一重ないし二重の竹管（丸棒）による円環状の当てがみられた（第11図▼）。

これは高台とするための粘土紐を、逆転させた碗の底部に貼りつけ、その端部をつまみ、同時に粘土紐を底部に押えつけて高台を薄く高く仕上げるが、両者の接着がより強固となるように高台を底面との接合部内周（場合によっては外周も加えて）を丸棒状工具によって押えた痕跡である。

これを〈円環状押え〉と称しておこう。

2. 高台内側の中央部分を円形に、特別にナデを加えて糸切り痕を消しているものがある（2.5）。

これは恐らく、高台端部の整形時に指の腹部を高台に当て、指先を中央部分に当てて、回転ナデを加えた折に生じた痕跡と考えられる。

これを〈中央部円形ナデ〉と称したい。

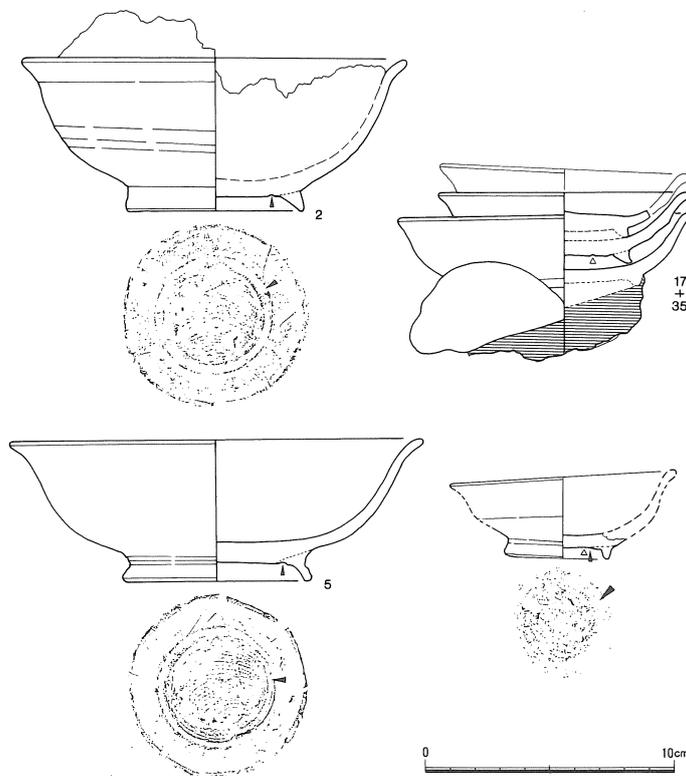
3. 従来「爪形（状）圧痕」と呼ばれてきた痕跡（第11図▽）がある。

通常、陶器職人は爪を短かく切っておくのであるが、古代陶器の量産体制の下では、爪切りもままならなかったようである。荻野繁春氏、林日佐子氏が説くように、「くせ」としてこれを抽出して、^{*1} 工人集団論を展開しようとする論考がある。繰返すが、これは特別な技法ではなく、高台用の粘土

紐を本体に接合する際に生じた最初の押えの痕跡である。

爪痕の弧が外反りになるもの、内反りになるものの両者がみえ、また高台を離れて中央近くに残存するものもある。

これを解釈すると、本来の粘土紐は眼前の仕上がった高台よりも相当高く、かつ大きかったと考えなくてはならないであろう。外反りの爪痕は、その粘土紐を指の腹部で押え、中心を越えて爪痕が残ったと考えられる。また中央近くの爪痕も中心を越えないで残った



* 1 荻野繁春ほか『老洞古窯跡発掘調査報告書』岐阜市教育委員会 1981

* 2 森浩一、林日佐子ほか『マムシ谷窯址発掘調査報告書』同志社大学校学術調査委員会 1983

第11図 底部調整技法集成図

痕跡と考えられよう。そしてこの粘土紐を整形するためには、必然的に端部の削り（切断）を行ったと理解できる。これを<爪痕>と称するが、従って工人の系譜関係を考えるには有効ではないと思う。

4. 他に、重ね焼成時の陶器内面と高台の融着を防ぐために、高台端部を傾斜させ、その面に研磨を加えているものがある。これを<高台研磨>と称したい。

そこで周辺地域の窯跡で生産された陶器を、器形上の相異も加味して、1の<円環状押え>と、2の<中央部円形ナデ>を手掛りに比較を加えてみると、本古窯跡の製品は旗指窯の工人が具備していた技法に共通すると言えよう。第12図に旗指窯製品を報告書から転載したが、確実に<円環状押え>を確認できる。また<中央部円形ナデ>については、それを強く残す例は少ないものの実見することができる。ただし技法として定立できるか否かは明確にし難い。<高台研磨>については敬見できる。

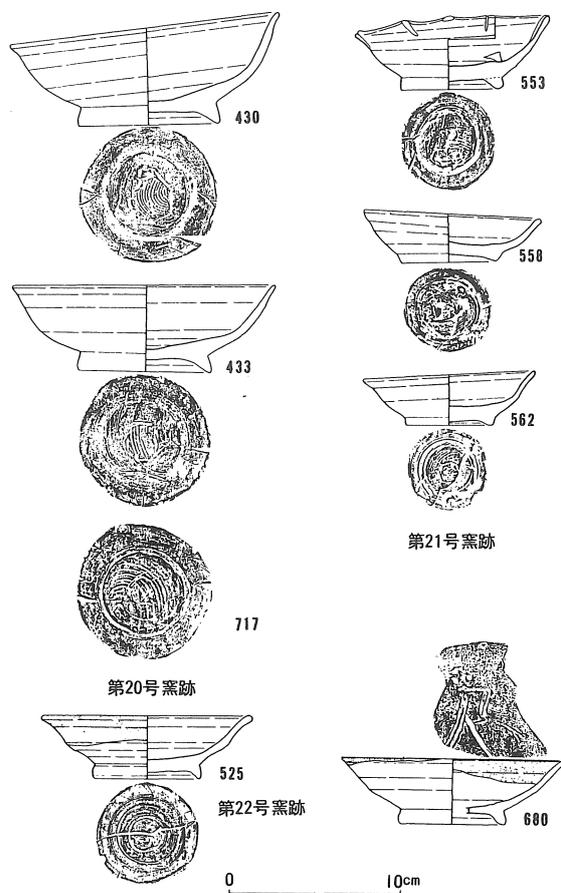
旗指窯と器形を比較すると、第20号、第22号窯に酷似しており、本古窯の製品は最早皿の焼成をあきらめてしまった段階に相当すると言えよう。

これに対して、清ヶ谷窯跡群との比較をすると、井口みかん園窯跡採集の陶器片には、<円環状押え>が観察され、また白山窯、栗本園窯にもある。<中央部円形ナデ>はいずれの窯跡でもはっきりせず、代って、高台内周をかなり幅広くナデる技法が顕著である。4の<高台研磨>は広く各窯跡で確認できる。

ここで土器乾燥法に言及しておく、高台端部に残る痕跡から高台接合後の土器乾燥法にはいくつかの類型がみえるようである。例えばA：平行する棒状圧痕からスノコの上で乾燥させるもの、B：特に山茶碗に顕著であるが、断面方形の高台にはよくモミの圧痕が残る。これはモミ殻の上で乾燥させた為に生じる。C：高台端部の平面に砂を噛んでいるものや砂の痕跡が残るものがあり、砂の上で乾燥させた結果である。釜ヶ谷窯跡では灰釉陶器の器形を残した陶器の高台にモミ痕がみえる。またうさぎ淵赤山窯跡の製品には砂敷き痕がみえる。他方、山茶碗段階の菊川町皿山古窯跡では、図版に示したように、モミ穀敷き乾燥が一般的と言えよう。

清ヶ谷窯跡の資料については、その一部を実見したにすぎず、十全な比較は不可能である。それでも<円環状押え>がみえる井口みかん園窯跡の製品と二ノ谷古窯跡製品の類似を除いて、また器形の上からも、清ヶ谷窯跡群とは関わりが薄いと考えられる。

以上のように考察を進めてくると、同時代に属する窯跡の間には、いくつかの類似点が窺えるようである。例えば台付小碗の器形上の類同である。また<高台研磨>の技法である。さらに、井口みかん園窯跡出土の皿は旗指窯跡出土の段皿（683）と同じように、内面にも<円環状押え>をみることができる。同種の器形を有する陶器相互に、同じ技法がみられる点に留意しなくてはならないであろう。即ちこうした同一技法や同一器形は<高台研磨>が焼成技法の一致を物語るものであり、また台付小碗の器形上の類似がさらに猿投山窯跡



第12図 旗指古窯跡出土土器集成図

群の内まで広範にみられることから、複数窯跡間の人的な交流を証すると考えられる。目下のところ、このような交流がどのような伝習体制のもとで伝達されるに至ったかは詳かでない。しかし、さきにも述べたように、本古窯跡の場合には旗指窯終末期に相当し、尚かつ技法・器形上の類同がみられることから、旗指古窯跡から本窯跡への直接の、工人の分派が考えられる。このような状況は旗指窯での生産の行きづまりと東国での需要の拡大が考えられるが、それを単に経済関係だけから理解するのは、何故この地に二ノ谷窯を、それも短期間営なまければならなかったのかを説明できず、不十分である。この点については後述することにして、ここでは旗指窯から二ノ谷窯への工人の移動を立論するに止めておきたいと思う。

3. 窯業生産の成立 一文字資料からの検討

清ヶ谷窯跡群の成立は国衙窯としての性格がみえ、国府に付属する窯として成立したと考えられる。また、助宗窯跡群の場合は志太郡衙との強力な関係で成立したと考えられる。

旗指窯の場合は、1) 御厨との関わりと、2) 千葉山智満寺との関わりが考えられる。

この旗指窯から出土した銘陶器片をみると、「灰天人」(679)、「女」(「安」の異体字と推定684など)、「富得」(683)、「天口」(685)、「大」(688など)、「本」(676)、「東」(689)などの文字が解読できる。また「尺」(680)があり、これは「尼」の異体字と考えられる。従って寺社に関係するのであるが、この陶器は灰釉が掛けられており、器形も比較的古い。智満寺からも旗指窯製品が出土しておりそこにも両者の関係を窺うことができる。

他の文字については、1) の御厨との関係が想起されるが、以下に述べるように幾つかの遺跡から出土した文字資料をまず検討してから論証したいと思う。

- 「大」^{*1} 県内では浜松市伊場遺跡、可美村城山遺跡、袋井市長者平遺跡、焼津市道場田遺跡、御殿場市永原追分遺跡例があり、全国では秋田県から福岡県まで出土している。
- 「本」 湖西市運動公園遺跡から出土している。また秋田県から奈良県までの出土が知られる。
- 「東」 南伊豆町日野遺跡から出土し、全国でも宮城県から熊本県までの出土がある。

以上の三字を例に検討してみたいと思うが、「大」については城山遺跡に「太大」の文字がみえ、千葉県渡戸遺跡、神明社遺跡では「大大」の黒書土器があること。また後述するように伊勢神宮祭神の天照大神を「太一」(たいいつ)と称し、これを「大一」と書く例があり、また伊場遺跡や鳥取県伯耆国分寺で出土している「大一」が「太一」と同意異字表示と考えられることから「大」=「太」としてよいであろう。逆に言えば「大」と墨書された土器のうちには「太」を意味するものが含まれていると解釈できよう。

次に「大」と「本」の両者を共に出土する遺跡には、秋田県脇本遺跡、長野県生仁遺跡、奈良県西隆寺遺跡があり、セットで出土している点は重要である。

上記の遺跡の中で、御殿場市永原追分遺跡は大沼鮎沢御厨の中心域に位置している。こうした性格は当然文字資料の上にも反映していると考えられて、検出された1軒の住居跡から^{*3}「八十」と墨書された9世紀代の坏が出土し、遺構外から「十」、「大」、「八千」と書かれた土器が出土している。「本」は「本」と書かれることが多く、あるいは「𠂔」、「𠂔」も「本」とすることができるかも知れない。その当否はともかくとして、御厨即ち伊勢神宮に関わる文字の一端を知ることができると思う。

ただし、これらの文字が吉祥句と考えられることから「祭り」の同一性を示していると解することが

* 1 斎藤忠博士の集成による。斎藤忠、向坂鋼二ほか『伊場遺跡遺物編2』浜松市教育委員会 1980

* 2 外宮領蒲屋御厨の中心域に位置すると考えられ、59年12月から調査された。

* 3 小野真一ほか『永原追分遺跡』御殿場市教育委員会 1978

でき、これらの文字を根拠に即御厨の証明とすることはできないであろう。この点に注意しながら、次に斎宮址と平城宮跡及び伊場遺跡の文字資料を検討して、論拠の補強をしておきたいと思う。

斎宮址の文字資料 斎宮址から出土している墨書土器等の文字資料は意外と少ないが、中でも「大」は34次SK1445を始めとして、36次、37次、古里遺跡C地点等で出土し、特に山茶碗に多くみられる。^{*1} その内でも37次SK2450からは8世紀代に属する坏にヘラ書されている例が出土していて注目される。「大一」については、古里遺跡C地点のSD19から出土した山茶碗の底部外面に「大一」と書かれた墨書1例があり、これを反転墨書と呼称して記憶に止めて、加えて中世以降に比定される土師器に「太一」とヘラ書きされたものがある。^{*2} 「本」については16次SK146からと24次SD168から「本」と読める墨書土器が出土している。また34次SK1445からも墨書の出土がある。「八」は10次調査の土師器皿にヘラ書きされたものがあり、小俣町離宮院跡から出土した平安時代末に比定される高台付土師器小皿の内面に墨書されたものがある。

上記以外の文字としては「万」、「北」、「罌」、「萬」、「年平」、「釈」、「単」、「水司鴨口」、「膳」、「中」、「一條十六」などがあり、伊勢神宮に近接する高向C遺跡からは「主」が8点出土し注目される。

さて繰返し注意を促してきた「太一」には吉野裕子氏の考証がある。氏の説くように天照大神が「太一」(=北極星)に習合されたと考えられる。^{*3} 従って皇大神宮伊雑宮御田植神事の大駑の上方につけられた団扇に日月、舟と共に書かれた「太一」の文字は伊勢祭神そのものを表わしていると言えよう。即ち「太一」という墨書は伊勢神宮の象徴であると考えて差しつかえないと思う。従ってこの字を出土する遺跡は例えば御厨をはじめとする伊勢神宮領との関係があると判断できる。

また「太一」を「大一」と表記する例からも、さらに前に示したように「太」=「大」と解釈できることから「大」の文字資料を出土する遺跡もその範囲に納めてよいと考えられる。^{*4} ただし単独資料で判断を下すのは危険であり、複数の文字資料によるセット関係から推測をくださなければならないと思う。

翻って「八」の用字については、「八」が無限の数量、程度を示し、また「ヤマタノカガミ」や「ヤサカニノマガタマ」など古来からの日本民族の神聖数と考えられてきた事から、単に伊勢神宮でも用いられているからと言って、この用字を神宮との関係でとらえることはできないと思う。ここでは「本」と「大」と共にセットでの用字が斎宮跡でも、また大沼鮎沢御厨比定地の御殿場市永原追分遺跡でも確認できる事に着目し、一定の文字から伊勢神宮との関係が推察できる点に注意を促しておきたい。

「太一」をはじめとして陰陽道を基本理念とする思想体系は、律令社会の底流としてあった。従ってこの波は平城宮跡のみならず、国府や群衙にまで及んでいたと考えられ、斎宮は勿論のこと、伊勢神宮が主導した御園や御厨等の神領でもそれを具現化した用字を見出すことができるはずである。

平城宮跡から出土した墨書土器には「太一」こそみられないが、「大」、「本」、「八」などの文字をみる^{*5}ことができる。

* 1 斎宮跡発掘調査事務所の谷本鋭次氏には資料の実見に際し高厚配を賜った。また所長をはじめ調査員の方方には御世話をかけた。厚くお礼申し上げる次第である。

* 2 反転墨書(反転ヘラ書き)とは鏡像関係にある文字の事である。最近いくつかの例が実見できたが、南伊豆町日野遺跡では「太」の反転ヘラ書き文字が土師器杯身の体部外面に書かれた例がある。尚、これまで読解不明とされてきた文字もこうした観点から見直す必要がある。

* 3 吉野裕子『隠された神々』講談社 1975。P 103

* 4 * 3に同じ。

* 5 奈良国立文化財研究所『平城宮出土墨書土器集成 I』 1983。

伊場遺跡の文字資料 奈良時代後半の須恵器坏身の底部外面に「大一」の墨書をみることができる。東国でも特に遠江には中田神田と浜名神戸、篠原神戸がみえ、伊場遺跡の周辺地域が比較的古い段階から伊勢神宮との関わりをもっていたのは確かであり、恐らく奈良時代後半期には伊勢神宮領が伊場遺跡周辺に成立していたものと想像できる。また「太」、「大」、「主」、「八」がみえるが、中でも「主」は全8点が10世紀中葉頃に比定される土器に墨書されている点が注目でき、加えて「本」が判読されていない点にも注意する必要がある。

以上に述べてきたように、特定の文字は伊勢神宮領との関係を語っているようである。そしてダイレクトにそれを語るのは「太一（大一）」であるが、恐らくは陰陽道思想が仲介して「大」、「本」、「八」などの文字がそのつながりを物語っていると考えてみた。

そこで旗指窯に戻ると、大津御厨の近隣地である事と併せて、「大」や「本」も御厨との関係を推測させるとしてよいであろう。従って旗指古窯跡の成立は御厨と関係をもって成立したと考えたい。

尚ここで少しばかり付言しておく、各地の窯跡から出土した在銘土器片を調べてみると、例えば正家1号窯からは長頸瓶胴部に「千」が、岩崎24号窯跡からは灰釉陶器の底部内面に「大」他にへら書きされた資料があり、陶印には「大一」^{*1}かと思われる陰刻がある。またNN-282号古窯跡からは灰釉碗の内外面に「大」^{*2}が、広口瓶の底部外面にも「大」^{*2}が、また広口瓶の頸部外面にも「八」がへら書きされた資料が出土し、さきにみてきた用字例は愛知県猿投山窯跡群周辺でも確認することができる。

これらの地域の全てが御厨に比定できるか否かは検討する時間がなく不明であるが、あるいはこれらの文字を吉祥句や祝詞の一部と考えても、繰返すように、これらの古代窯業生産地を結び、生産者の紐帯となる具体的な組織や制度化された祭祀を想定しないわけにはいかないであろう。

さて、本古窯跡ではこのような在銘片こそ出土していないが、旗指窯をはじめ窯業生産の分野においても御厨が主導した遺跡が存在すると考えられて、確かに間接的ではあるが、本古窯跡をとりまく歴史環境から本古窯跡への工人の移動も御厨が仲介してのことと考えられる。

最後に、これまで述べてきた商品生産に御厨がどのような役割を果たしたのかについて展望してみたいと思う。

4. 御厨と商品生産 一まとめにかえて一

中世社会にあって、京の権門勢家を本所として供御人、神人、寄人などの商品生産一流通に携わる人人が編成されていた。彼等は座を組織し、仕事の独占と販売権の独占を目指したが、本所の側も特に東大寺をはじめとする有力寺社は彼等に特許状を与え、商品流通の掌握を強力に進めた事は従来から説かれたところである。こうした時代の状況に対して神宮は、地方での受領層による荘園の拡大のなかで神税の収納も困難となってきた。そこで神宮は太政官符をもって全国の田地に対して大神宮役天工米の制度を施行して式年遷宮の造営費に充当するが、神宮である権禰宜等がこの役夫工米の勧進に全国を廻るのである。神宮側からの勧進があつてこそ、私的信仰心からのみの寄進では理解できない御厨の増加が得られたと想像できる。その際見逃してはならないのは、御厨の選定にあたっては神宮側の選択が働いたと考えられる点である。それは駿河国高部、楊津御厨が成立した11世紀後半以前の事であろう。

御厨から神宮への貢納品には、例えば大津御厨からは白布・紙であり、方上御厨からは米であった。他の御厨からは銭も納められている。これは前掲の西垣氏が注意したように、伊勢以外の国々に所在す

* 1 斎藤孝正ほか『正家1号窯発掘調査報告書』恵那市教育委員会 1983

* 2 斎藤孝正ほか『株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』日進町教育委員会 1984

* 3 小島一夫ほか『NN-282号古窯跡発掘調査報告書』名古屋市教育委員会 1982

る所領では「多彩な雑公事が祭祀のために上納される」という役割を担っていたからである。この様な上納品の御厨内での確保が、例えば陶器生産をはじめとする商品生産を御厨内へ植え付けることで果されたのではないかと想像している。そしてこの殖産こそ神宮がかかえる技能民によってなされたことであろう。

勿論以上の考えは推論の域を出るものではなく、文献からの考察は今後の課題であるが、まずは寄進する側の論理と寄進される側の論理の一致点を見出す作業から始めなくてはならないと思う。その際商品生産の問題はこれを解く一つの鍵となろう。

さきにも触れたように旗指窯から二ノ谷窯への工人の移動は、東国での陶器需要に対応しての事態であるのか、あるいは生産が衰退する旗指窯の終末期にあって、工人が分離独立することで旗指窯の維持を図ろうとしたためかは速断できないが、これも御厨の経営を支える方策の一つであったかも知れない。

VI. 二ノ谷古窯趾雑感

小笠北小学校長 田 中 貢

「いま、二ノ谷の窯跡を発掘中だが、一度見てくれないか」という電話を、県小笠町長から頂いて、町教委の竹内君の案内で現地に行った。

昭和 59 年 10 月 3 日のことであった。

一見すなり「ウーン、これは良い所に窯を築いたもんだ」と唸った。

私はかつて、県教育委員会の文化課で、全国で最後となった静岡県立美術館建設の初代担当という仕事をしているとき、文化課所管の埋蔵文化財発掘の仕事に専念する人々と、机を並べていたことがある。

それまで、アウトサイドながら、古代史を独自に研究して来たこともあって、埋文担当指導主事達とは、大変親しみを深くし、県下の大体のことは、見たり聞いたりしていた関係から、この町長さんからの電話は喜しくて、すぐに現地を見る気になった。

いや、もう少し本音を打ちあけると、少年期より、古代史に興味を持つうち、当然のことながら、土器類に異常なまでの関心を持ち、これが引き金となって、24 才のとき、ふるさと小笠山の土色に魅せられ、10 年間、森山焼本家の中村陶吉氏の弟子、更にその後、韓国の人間文化財、海剛先生を師と仰ぐ陶生活三十余年という立場から、特に古窯趾については特別の興味があって、「古窯趾の発掘」という電話に過敏に反応した、と言うべきか。

それはともあれ、現地の様は、大変残念なことに、周辺、ことに窯趾の南側に広がる自然が非常に広範にわたって開墾され、かつての時代はしのおべくもない。

南北の舗装道路から東に向かう谷、その北側斜面の中腹部上段を使って窯は築かれていた。

車が止まったのは、その窯趾のほぼ真正面の位置であったから、私は一步車外に立って眺めるなり、「ウーン」と言ったのである。

それは、これまでに見たどの古窯趾にも増して、風向を始めとする「焼き」の条件にかなった所であったからである。

車の所から茶畑の間を、ダラダラと谷底に下り、また窯に向かって斜面を登り出すと、近くの畑に一人の老婆がいた。この人が、この古窯趾のある茶畑の持ち主のようだ。

さらに急斜面を登って行くと、発掘をほぼ完了したかに見える窯趾に着いた。

こうなるともう、日頃まことに鈍重な私の頭が、ピーンと張った全神経と見事に連動して急回転を始め、全身が目になる。

秋もまだ始めだというのに、風が強く冬のように冷たい。数片の土器片を、さきほどの老婆が、まるで貴重品の様に竹内君に差し出すのを横目で見ながら、10 分ほどで私は車に戻った。

車内は暖かく、竹内君はしきりと私に説明してくれるのだが、生返事でそれに応えながら、私の頭の中では、クルクルと今見た窯趾について、次の様なことが駆け巡っていた。

残念ながら、灰原は攪拌され、分炎柱も見当たらないようだが、表土が浅いのに何回も行われたであろう深耕や開墾に耐えて、保存の状態は良い方だな。それにしても、この急斜面、急角度、角度的には「穴窯」の類では、これまで見た多くの窯趾の中で最高角度と言うべきだ、是非発掘担当者にこの点の検討を求めなければと思う。

穴窯は、山肌の斜面に直接築かれるために周辺に降る雨水が、サイホン効果で窯の内面に浸入し、「焼き」に一番の敵である水気を呼ぶ。そのために火度が上がらず、焼成効率を半減させる。現代作陶家もこれに泣くのだ。

しかし、この二ノ谷の窯は、その異常なまでの急角度によって、降水量をいっきに下に流し、帯水時間を短かくし、したがって窯内浸潤を最低とする効果を発揮するだろう。そしてその上に、どんな燃料をも強力に燃焼させる能力をも発揮したのではないか。

普通、焼きものには、この穴窯と呼ばれるものの他に、あの縄文式土器を焼いた、地表に穴を掘っただけの野焼き式のものから、丸い筒の下から火を燃して、上から煙を抜き、中の作品を焼く「直炎式」と呼ばれるもの、又、炎が窯の中で反転して、煙道に導かれる「倒炎式」と呼ばれるものなどが、その目的によって使われている。

直炎式の窯は、せいぜい摂氏 900 度くらいしか温度が上がらず、素焼きの植木鉢のようなものしか焼くことができない。

しかし、倒炎式の、炎が窯の天井に当たってひっくりかえり、窯底の吸い込み口から、煙道を通して煙突から空気中に抜ける式では摂氏 1500 度位まで窯内温度を上げることができる。

現代の陶磁器は、ほとんどがこの式で量産されている。あの江川太郎左エ門の反射炉もこの式で鉄を溶かし大砲を鋳ているのだ。

縄文時代は別として、この二ノ谷の窯の類になると、中国や韓国から、それまでの土器に比べて、もっと固いもっと白い、丈夫で美しく、しかも水の漏らない器を焼く技術が、ロクロという同心円に器物を作る道具を伴って日本に入って来、またその為の窯の作り方も伝わって、西日本から東へ広がっていく。この小笠町の一之谷の住人も、見事にこの技術をマスターして、その姿をこの古窯趾にとどめている。

この「穴窯」と呼ばれるこの窯は、直炎式と倒炎式との中国の窯と考えて良いが、どちらかと言えば直炎式に近く、したがって、山の斜面に沿って下から上に溝を掘り、その底の部分に水平な段を作って、作品が窯の中で水平に立つようにし、左右の壁の部分の部分を地表に積み上げ、これをさらに上に伸ばしてしぼり天井にする、炭焼窯を細かくして、出の斜面の上の方まで伸ばしたものと考えれば良い。

倒炎式の窯をまだ考えつかない時代の人々が、大苦勞して研究した結果編み出した窯にちがいない。

昔、中国の奉の始皇帝は、その国土が、北方民族の凶奴から度々侵害されることから、彼等との間に騎馬がよじ登れない壁、万里の長城を作ろうとして、数限りない煉瓦を焼かせたり、又自らの偉大さを後世に誇ろうとして、等身大の兵馬俑を焼かせたり、そのために、広大な土地の樹木を切り取って燃料とした結果、多くの砂漠を作ってしまったと言われている。

とに角「焼きもの」には大量の燃料を必要とする。

いったい、この二ノ谷人は、何をもって燃料としたか、これもまた大変に興味の湧くところである。焼きものの燃料としては赤松が最高である。炎が伸び温度が上がるからだ。

しかし赤松の数は知れている。

この一之谷の窯がこんな急斜面に作られているのは、おそらく、谷を吹き上げる風と、窯の急な傾斜とが相乗効果して、松材以外のどんな雑木でも、効率よく燃焼して窯内温度を上げ得ることをねらったものに違いない。

焼きものを焼き上げるための炎の性質には二つの種類がある。

一つは「酸化炎」と呼ばれ、空気をどんどん入れて燃やす完全燃焼の炎である。作品をこの炎で焼くと作品中の鉄分がさらに酸化されて赤く焼き上がる。

もう一つは、「還元炎」、これは燃料を窯の口いっぱい詰めて、空気を極力少なくして焼く不完全燃焼の炎だ。始め酸化で焼いて窯の中が900度となったとき、この還元焼成に切りかえていくと、燃えるために必要な酸素が、作品の土に含まれる酸化鉄 Fe_2O_3 の、酸素 O_3 が奪われて、 Fe_2 だけの鉄に還元され、作品は青白っぽく変色する。

これが須恵器の色なのだ。

こうして、縄文土器、土師器と酸化炎ばかりで低火度土器しか作れなかった人々が、見事に還元焼成の技術をマスターし、ロクロ技術の完成とあわせて、一大技術革新をクリヤーし憧れの「白と正円のシンメトリック」に到達する結果となった。

そして同時にそれは、不完全燃焼のための燃料は、貴重な赤松黒松でなくとも、どんな雑木類も、焼成のための燃料として充分であることを保証する道となったに違いない。

二ノ谷古窯趾の現在の周辺植生は、そのまま往古のそれでないとしても、かの闊葉樹林帯の名残りとも言うべき、この遠州地方自然林に分布するウバメガシなども、当然当時も繁茂していたに違いないしこれらが、還元焼成時には、他の雑木類とともに、大いに役立ったことであろうと思われる。

今、ここで、このウバメガシ（イマメ）を取り上げたのは、発掘現場に立ったとき左窯壁に、乳房状の大きな自然釉の垂れがあり、さらに良くこの自然釉の色を観察すると、ワラ灰の白っぽさや、松灰のみどりや青でもない。それは私が、小笠山の植物の中で、ウバメガシや栗皮やイガなど、タンニン含有率の高い植物を灰にして灰ったときの発色と全く類似していると見たからである。

このことは、これまでに述べた「燃料」の問題を考察する上での動かし難い決め手となろう。

それにしても、二ノ谷の人は、この須恵器本体の生地土をどこから手に入れただろう。

破片の白色は先の還元の成果としても、自然釉ができる火度は、1200～1300°Cのはずだ。この温度で焼かれた破片にダレがないということは、この近辺のどこかに、1300°Cに耐える木節粘土か、ガイロ目系の土があるということだ。

これは、大きな今後の課題のひとつである。

小破片を良くみると、生地土は山採りのものをそのまま練って使っている。このことは小破片が、その石ハゼや植物の焼き抜け穴で教えてくれる。

しかし、山採り土をそのまま粘土として使うには、石や植物などが可能な限り混入しないように採土しなければならない。その為には、少なくとも50cm以上の厚みの層を必要とする。そういう厚い粘土層が果たしてこの近くのどこにあるのか。

この二ノ谷の北方に、近年まで焼きピナを焼いていた高木さんのところには、代々の口伝となつてことによるとその位置が語り継がれているかもしれない。

さて、とにかく、この窯趾と小破片を残した二ノ谷の焼き物師は、一見して優れたものを多く持っていたと見るべきで、最も重要な「いのち」とも言える「窯」の立地条件としての場所を、「焼き」の効率を最大限に考慮して決定していること、次には、器物製作のポイントである「ロクロ焼き」の腕も相当に冴え、破片からだけでは速断し難いが、器物厚さ薄さへの配慮が、いわゆる「手だれ」のそれであつて、又、口辺の鹿皮による成形など、実に見事である。

口辺ばかりではない、ロクロ上の上を挽き上げてひとつの器を作り上げると、これを下の土から糸を使って切り離すのだが、その切り糸を、器の下のどの部分に入れるかによって器の底の厚さが決まる。このとき作者は、目測とカンだけで切る以外方法は無いのだがこの二ノ谷の作者は、実に底部の厚さを薄く正確にズバリと切っている。

この切り取り糸の目が、器物の糸底に渦目となって残ったまま、何等の削り修正もなく「高台」が着けられているのを見ると、技とその冴えを、するどく感じさせられてならない。

いまここで、「高台」についてふれだが、人類が「糸ぞこ」と呼ばれている「高台」に気付くのは、ずっと新しいことで、西欧のような、小麦文化圏にしても、中国や東南アジアや韓国や我が国のような米文化圏にしても、又、チャビン文化といわれるあの南米のペルーを中心としたトゥモロコシ文化圏にしても、各地の博物館に陳列されているそれぞれの民族の古代における焼き物には、いずれも「高台」は無い。共通して器物の底は、丸みを帯びて尖っていたり、丸くなっている。

この理由は何か。私は次の三つを考える。

まずその第一は、太古、人類が火を使うことを知った時点から、そしてこれを「煮る」という食物加工の方法を日常化するようになった時点から、器物は「食」の具として意識されて発達し、「火」は、下や横から器物にかかわらせて用を趣した。すなわち、石組の上や、土や砂、炉内の火や灰の上に据えて使用できるものであれば良かった。

第二は、古代住居の床面を見れば良く判ることであるが、古代の生活は、器物にとって現代の生活のように滑平面を保証していなかった。不定形そのものの面の上に自由に機能できる器物であれば、平面な底部を備えなくとも充分であった。

私はこれを、韓国利川の多くの窯場を見ているうちに気付かせられた思い出がある。

第三は、「焼き」からの要求という観点である。そして私はこれが最大の決め手であろうと思う。

すなわち、それまでの低火度焼成で生産されていた時代には、熱による膨張も収縮もすくなく、どんなに窯の底部や他の器物に接していてもひび割れやくっつきの原因は成立しなかったが、いざ、須恵（陶）の時代にはいって、穴窯の出現や還元焼成による高温焼成期の窯においては、特に焼成効率を追って皿などのように重ね焼きをする様になると、器物と窯床、器物同志の接触面での温度落差が甚だしくなり、膨張・収縮の度に多くのひび割れを生じて品質を落とす。

この現象を克服するためには、極力その接触面を小さくする以外にない。

先人たちは、こうして「高台」を生み出して来た。

いやはや、それにしても、何とこの二ノ谷の人は、その高台づくりの下手なことか、そしてまあ、なんと粗雑なことか。

これではあの冴えたロクロ挽きの腕が泣いているぜ、出土した小破片は、そう私に告げている。

実は、始めて高台のある小破片を手にした時、私は「アッこれは分業が進んでいる」「量産体制だ」「11世紀だ」「移出経路は陸か海か」などが直観的に頭の中を駆け巡ったが、竹内君の車が、Uターンする時あたりの地形がパノラマ的に廻るのを見て、海進の進んでいた当時の二ノ谷周辺の風景が、目の中いっぱい広がって、「移出は海路だ」と思うと同時に、その様子と、この窯に一家の命運のすべてをかけて、あわただしく忙しく立ち働く人々の姿がオーバーラップして浮かんで来た。

かって上古は、石器にしろ、土器にしろ、自給生活であったものが、土師から須恵へと進むにつれて人々の生活も複雑化し、やがては専門化してゆく。

優れた製作技術をもつ者、恵まれた生産条件にあるものだけが、焼きものの業に生きのこり、これを生きるよすがに家族を養っていく。

二ノ谷の場合もこうした経過を経てこの窯に一家の命が繋がっていたであろう。

かの加藤唐九郎氏は、昭和6年に“陶芸”という言葉を生んだが、そして、現在でこそ焼きもの師は“陶芸師”であり得るが、これは、今日のような平和な良き時代が40年も続いて始めて、文化的な心の遊びを意味する“芸”がふさわしく感じられもするが、あの秀吉の朝鮮出兵以来の茶の湯の御用窯師以外、その暮しは誠に貧しく、うだつの上がない一介の“職人”でしかあり得なかった。

途中で柳宗悦の民芸論も出たけれど、いくばくかの日の目とはなり得ても広く焼物師の口を濡らしはしなかった。

ここ15年かそこらの陶芸ブーム以外は、そうだ、この二ノ谷の人々と変わるまい。

残り少なくなった紙数の中で、窯趾にしゃがみこんで10分、私の感じ取ったことの中の一つ大切なこと、そのことにどうしても触れておかななくてはならない。それは数片の土器片をかの老婆に差し出さしめた者達への、ささやかな手向けともならん、と思うからである。

先に「いやはや、それにしても、何とこの二ノ谷の人の高台づくりの下手なことか」と書いた。しかし、下手であっても、下手のまゝ焼かざるを得なかった人達の熱い息使いを、私は心に強く感じるのだ。いくつかの小皿の底部破片の中に、高台が上部器体と技術的に全くなじまないものが多く見られる。これはなぜか。

かの冴えたロクロ挽き氏の腕をもってすれば、高台の整形など何のぞうさもないはずだ。

ロクロ挽き氏は高台を作っていない。

高台は後に、削り出し高台に変わっていくのだが、この時代では、取りつけている。

その取りつけが、実に雑であるということは、製作過程が完全に「分業化」しているということで、全く別の人間が、そそくさと、次々にいそがしく片付けていったに相違ない。

なぜそうしなければならなかったのか。

高台を付けるのには、成型された器物の本体を、小さな手廻しロクロ台に芯が出るように伏せて据え取りつける部分に粘土を水でゆるめたノタを塗り、高台となる粘土ひもを、ゆっくりロクロ台をまわしながら、片手でノタの上に押しつけていけばよい。そのあとで、高台らしく成型すれば、器体と同心円上に高台が、ふさわしい形でおさまる。

なのに、この破片の多くの高台は芯がずれてゆがんでいる。そして、その中のいくつかは、成型はしているが、親指と人差指の先とが作る尖った角度のままに焼かれている。

なるほど、尖ったままならば、先に述べた他の器物や窯床との接触面は小さくなって、ひび割れの防止にはうってつけだが、商品である。せめて尖った部分を水平に切るなり、鹿皮で撫でるなりしてもよかろう。

どうしてこんなに手を抜いたのだろうか。

当時はその主目的である皿の機能さえ満足されれば、使用時に見えない高台の部分は、そんなに問われなかったのだろうか。

いやそうではないはずだ。专业化し、量産せんがための分業化であり、それは移出による収益の増大をねらう体制下での商品のはずだ。

だのになぜ、こんなに手を抜いたのだろうか。

答は自らひとつ、そんなに手をかけていられないほど、仕事に追われていたと考えるしかない。

「働らけど働らけど、我が暮し楽にならざり」は後世の歌よみの歌だが、自らを省みる余裕すら持てない「一介の職人」の家族にしてみれば、歌の詠める心情などはとうていなかったろう。まして、季節や天候にまともな左右される焼きもの一家に見れば。

それを裏付ける証拠には、今回出土の破片のいくつかに、高台内にへらあとのあるものがあつた。

へらあとではない爪あとなのだ。

高台内に高台の周円とは逆孤となるこの爪あとは、高台付けの人間の爪の長さを物語る。

どんな無雑作に作品を作る人間でも、焼き物師は必ずロクロに向うときは爪を切る。作品を傷つけまいとするからだ。常識である。

この高台やその爪あとから、生活が苦しく我が身をかまうゆとりもなく、幼な児を背にくくりつけ、必死になって夫を助け、少しでも豊かな暮しを夢見て、ひたむきに生きる、900年前の一人の「女」の姿が浮かんでならないのは、私が焼き物師なるが故か。

春になったら、私はもう一度、この窯趾に立って見たいと思っている。

VII ま と め

以上に報告した二ノ谷古窯跡の調査で得られた成果をここで再度まとめておこう。

1. 窯体は半地下式の無階無段の穹窯で、全長 5.85 m、焚き口部で幅 1.20 m を測る。床面傾斜角は約 30° である。
2. 西側壁は溶融してガラス化して、暗緑色を呈していたのに対し、東側壁の残存は不良である。
3. 床面は焚き口側の残存が良好で、補修痕から最低 2 回の焼成が確認できた。また初回焼成時の床面には馬爪形焼台を伴った最下面の陶器が融着して残存していた。
4. 灰原は主軸から東へ偏在しており、多量の遺物を包含していたが、およそ、6.3 m × 4.5 m の範囲を有していた。
5. 出土した遺物は灰釉陶器の器形を残しながらも無釉の陶器であり、本古窯跡では壺のみを生産していた。これらは大壺と小壺に分かれ、中には輪花壺もみられた。他に窯道具の出土をみた。

さらに報告書では工人の系譜や成立要因を探ってみたが、その結果本古窯跡は、窯構造と陶器底部の整形技法から島田市旗指古窯跡との関わりが深いと考えられた。即ち足立順二氏が注意したように、古代の行政単位である国を越えての工人の移動があったことになる。この工人の移動を可能にした要因が同時に本古窯跡の成立要因であり、これを御厨に求めてみた。私見に対しては、既にこれも足立氏の否定的見解があるが、今回は文字資料を使って具体化に努め試論を展開した。本稿を基に今後は御厨が主導した（商品）生産^{*2}について、稿を改めて考察したいと思う。

扉に示した昭和 4 年の発掘で検出されたそのままの窯体を、今回の調査で眼前にした時、それは驚きであった。丁寧に埋め戻された窯体埋土を見た時、守り続ける努力が胸に染みわたった。この度、地主森氏をはじめとする地元の皆さんの要望で、茶の木改植を前にしての調査が可能となったが、調査の終了後は重機を導入せずに森氏の手で改植が行なわれる事になった。

地元の作業員の皆さんは、降雨の中の作業にも進んで参加され、郷土の文化財を自らの手で守ってこうとする熱意に満ちていた。

また、調査には渋谷昌彦、吉岡伸夫、松井一明、坂巻隆一、前田庄一の諸氏をはじめ、若い仲間の援助と協力があつた。

整理作業には畏友小川英文氏の激励と協力があって、作業を順調に進めることができた。

そして、町教育委員会の赤堀啓二氏は連日、現場作業に事務処理にと精力的な協力をいただき、また竹内英俊氏には細々とした雑務処理をしていただいた。その裏で、教育長の赤堀英夫氏、事務局長の榎松康弘氏をはじめ教育委員会の皆さんには、ひとかたならぬ御迷惑と御世話をおかけした。

尚、今回の報告では、数々の有益な御教示を賜った田中貢先生には、お忙しい中原稿執筆を快諾していただいた。心からお礼申しあげる次第である。

短期間の調査ではあつたが、その計画立案から報告書完成までには、どれだけ多くの人に協力をいただいたか分からない。ましてひとつの文化財がこれから先も守りつづけられるためには、どれ程の情熱が注がれる必要があるのだろう。いずれにしても、わずか一基の窯跡にすぎないが、確実に現在まで人々の手で保存することができた本窯跡の行く末を、私は見守ってゆきたいと思う。

*1. 2 足立順二「中世陶器生産と消費・序説」『東笠子（HK）第 27 地点遺跡発掘調査報告書』湖西市教育委員会 1982

圖 版



三ノ谷古窯跡



1. 発掘区遠景



2. 完掘遠景



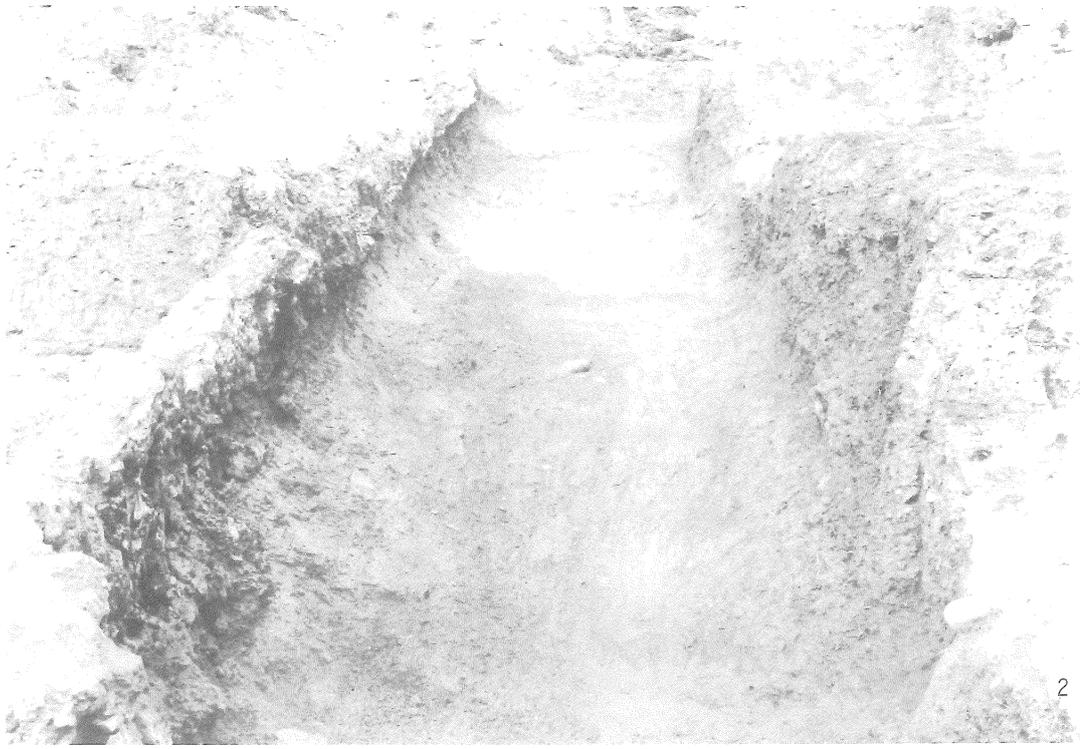
3. 発掘風景 1



4. 発掘風景 2



1. 窠体
完掘状态



2. 窠体完掘状态
近景

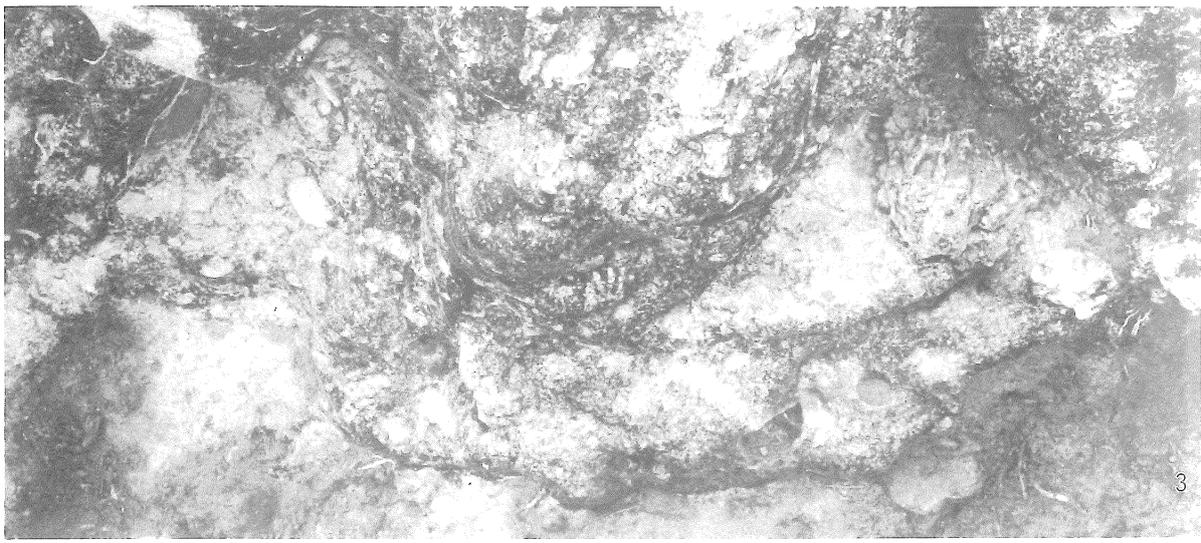
1. 右侧壁
上方状态



2. 右侧壁
下方状态

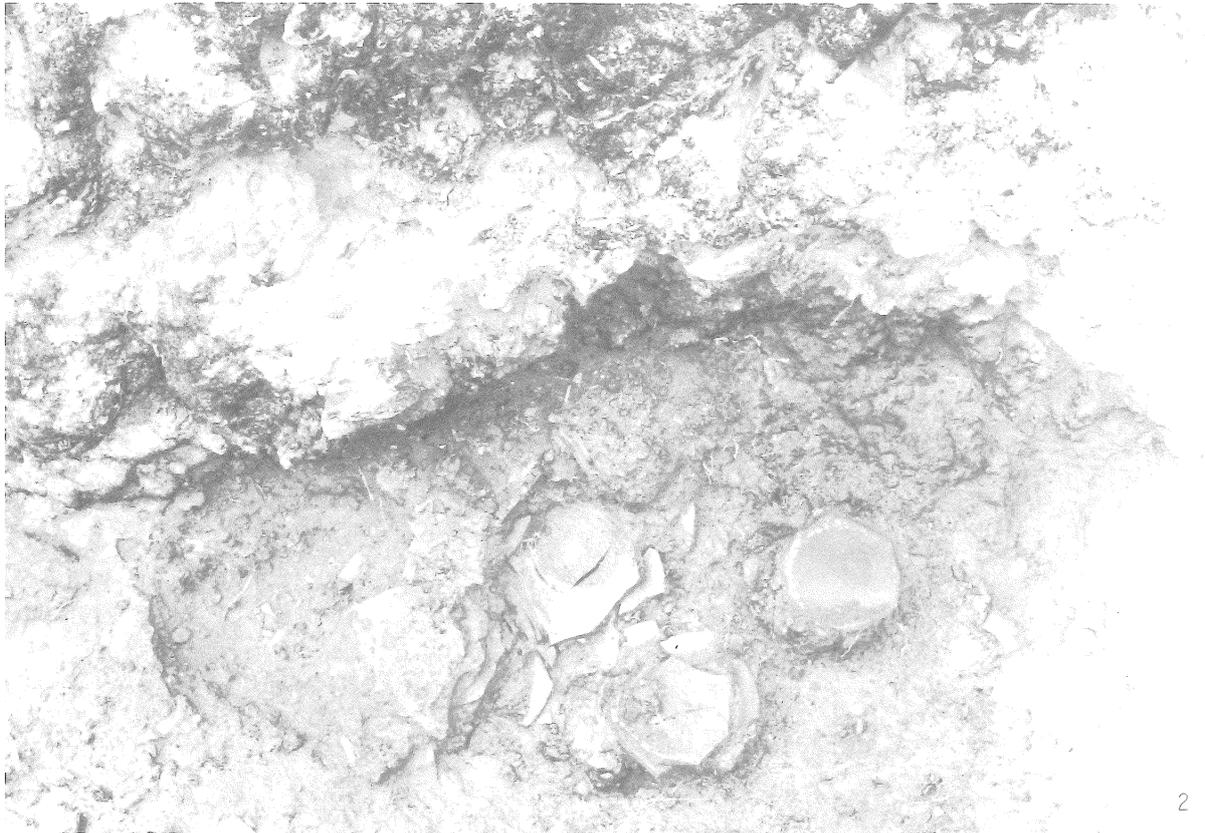


3. 右侧壁
下方部分





1. 遺物
出土狀態 1



2. 遺物
出土狀態 2

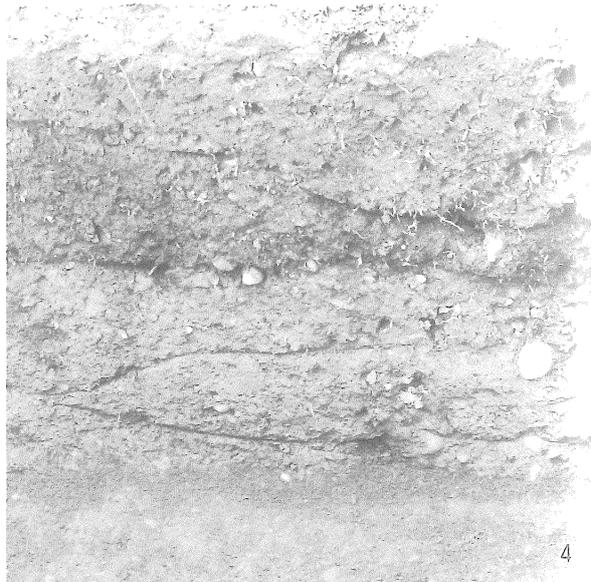


3. 遺物
出土狀態 3
4. 遺物
出土狀態 4

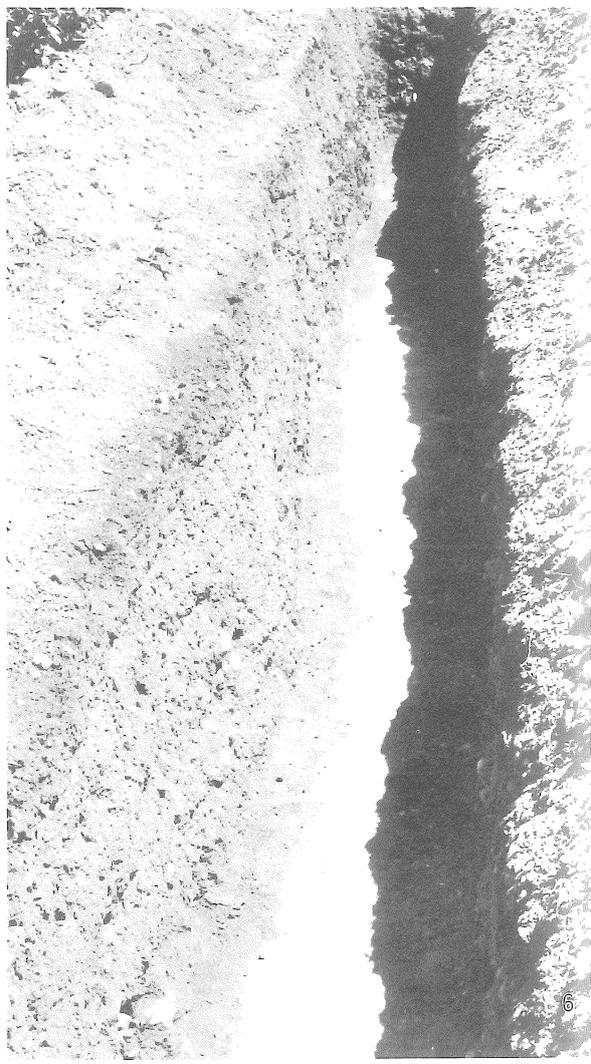
- 1. Aトレンチ
土層堆積状態
- 2. Eトレンチ
土層堆積状態



- 3. Dトレンチ
土層堆積状態 1
- 4. Dトレンチ
土層堆積状態 2



- 5. Bトレンチ
土層堆積状態
- 6. Cトレンチ
土層堆積状態





震体断七割り採録

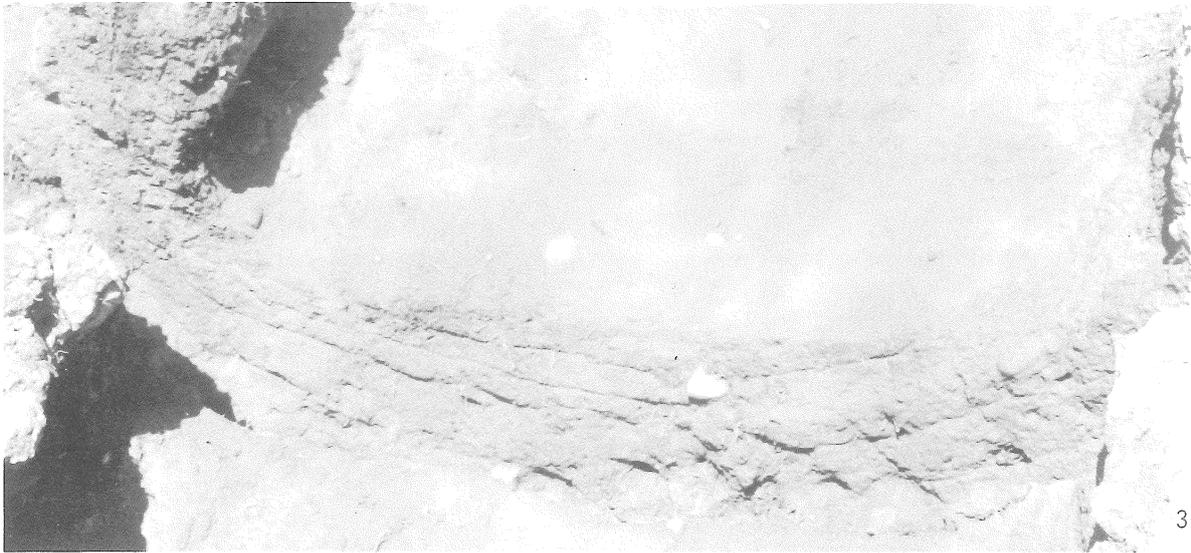
1. B-B'
断面状态



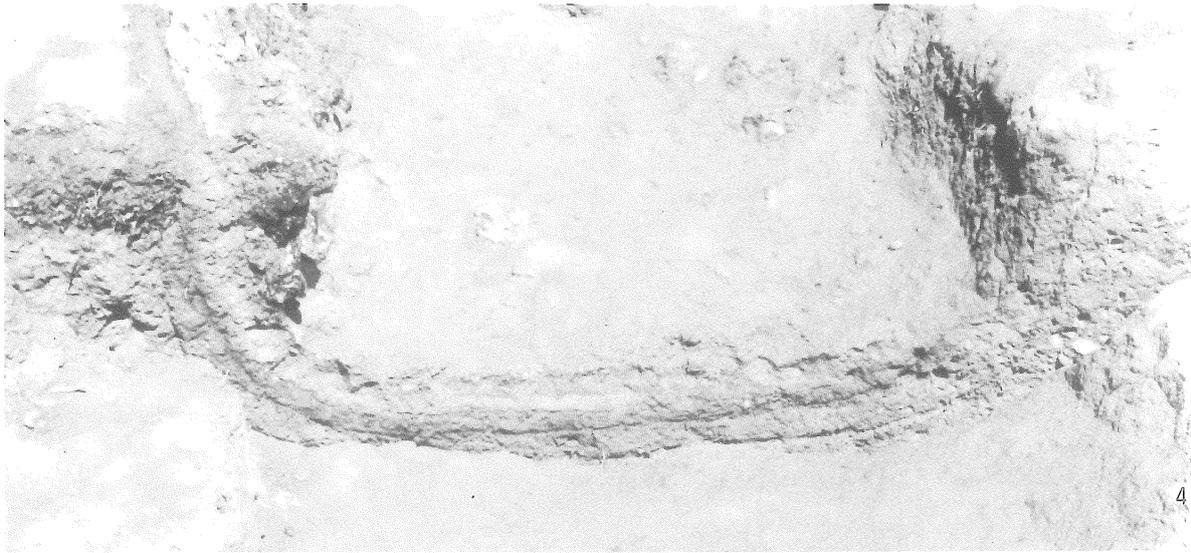
2. C-C'
断面状态

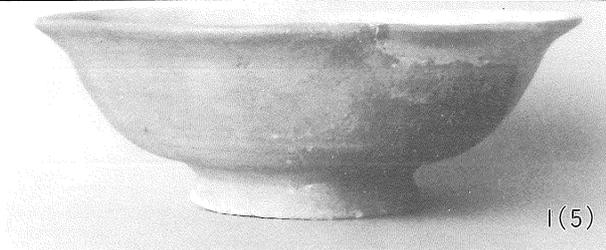


3. D-D'
断面状态

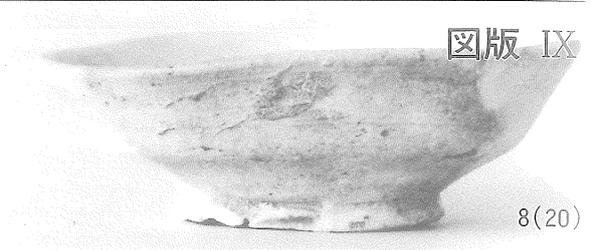


4. E-E'
断面状态

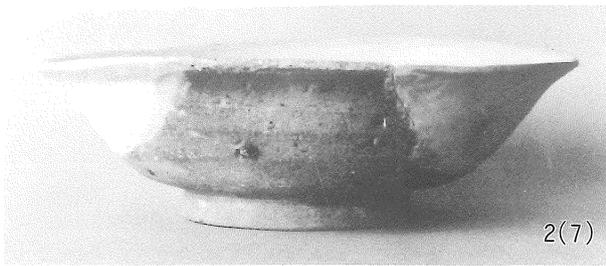




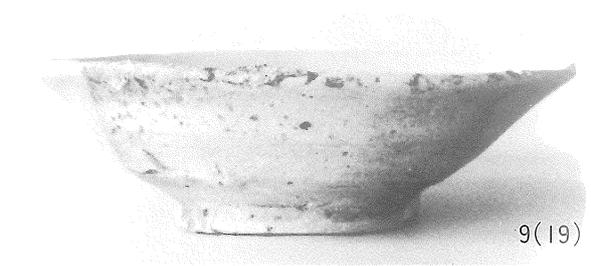
1(5)



8(20)



2(7)



9(19)



3(2)



10(23)



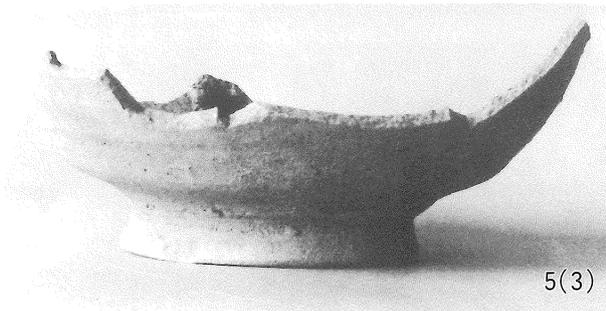
4(1)



11(12)



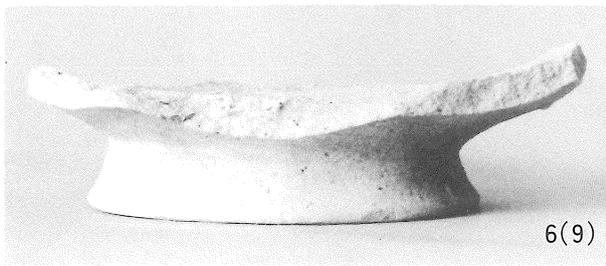
12(22)



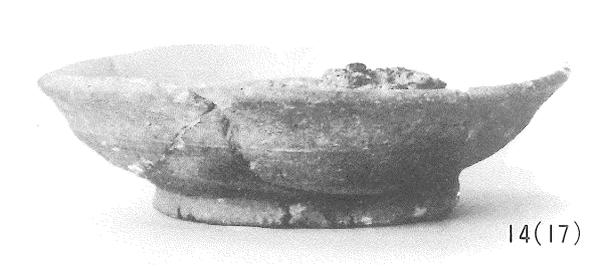
5(3)



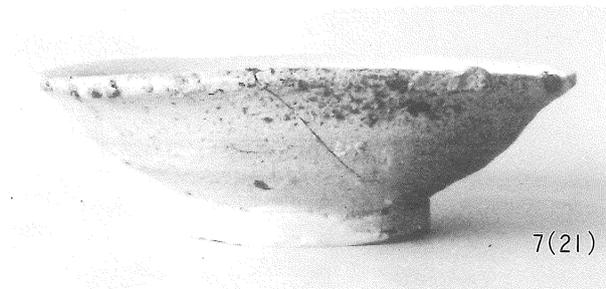
13(24)



6(9)



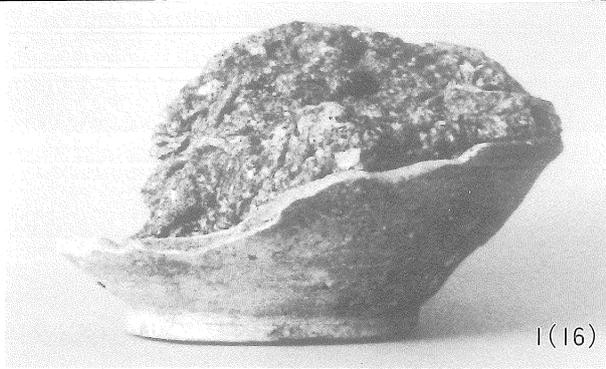
14(17)



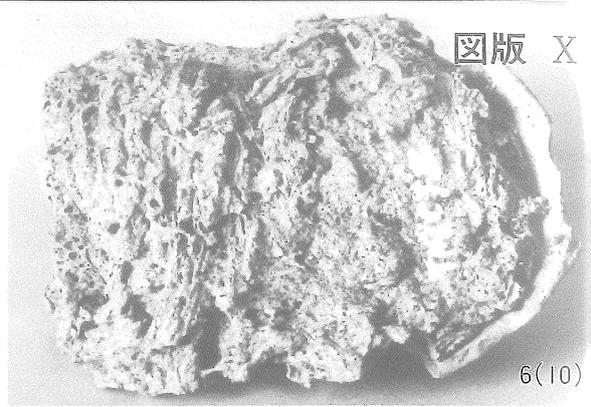
7(21)



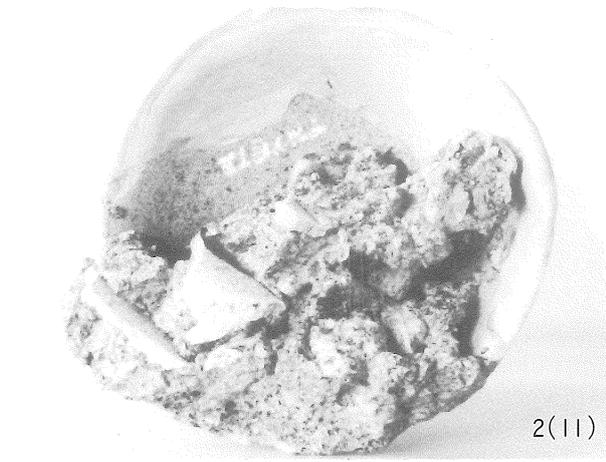
15(25)



1(16)



6(10)



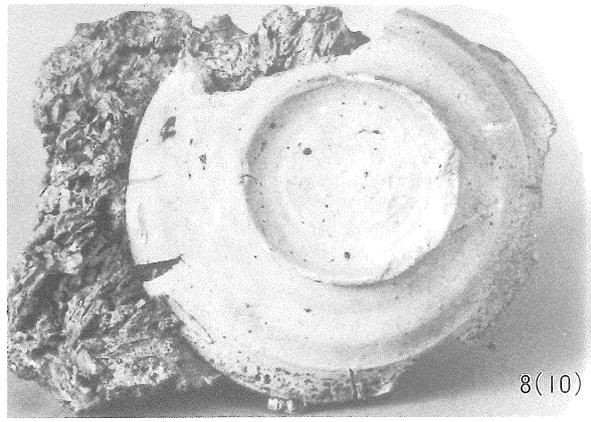
2(11)



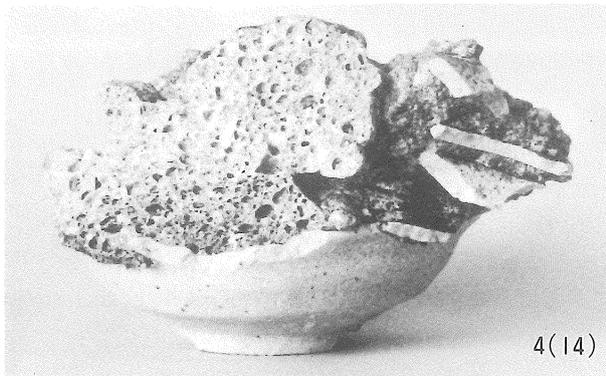
7(10)



3(13)



8(10)



4(14)



9(12)



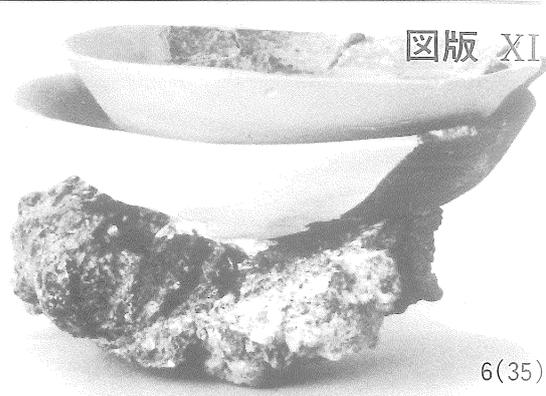
5(15)



10(12)



1(2)



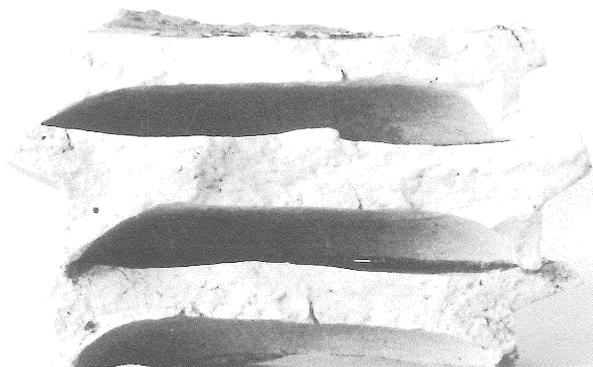
6(35)



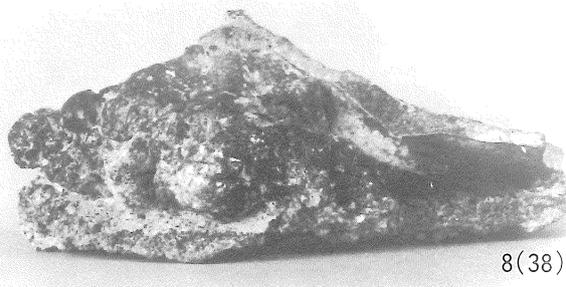
2(34)



7(39)



3(33)



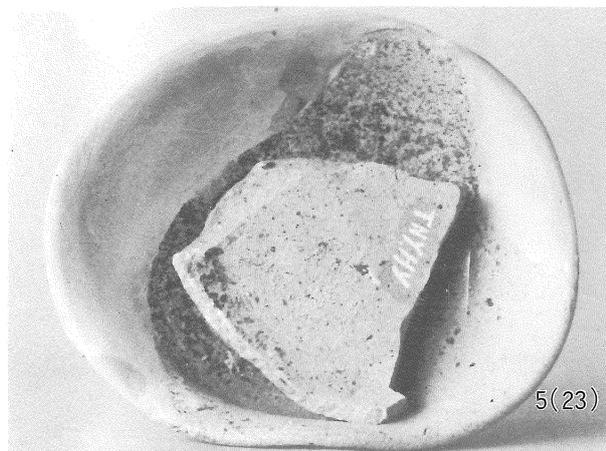
8(38)



4(17)

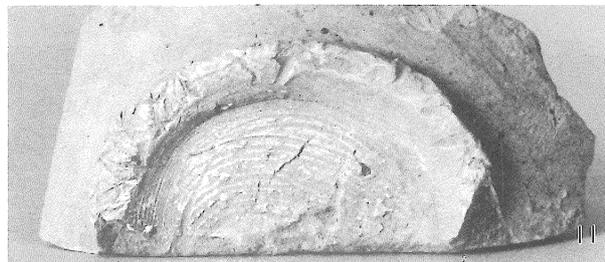
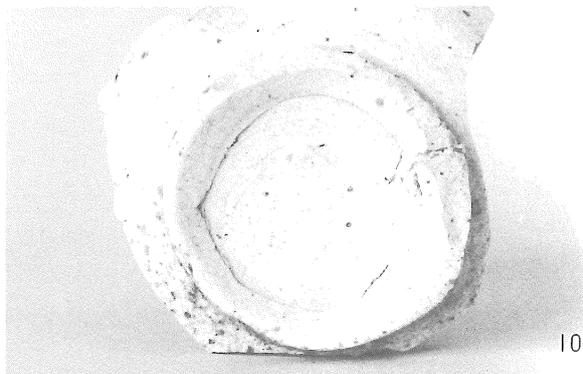
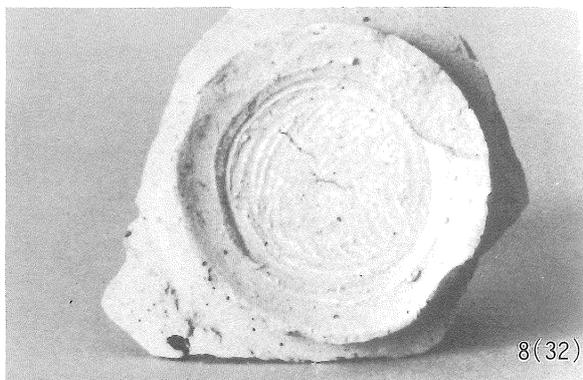
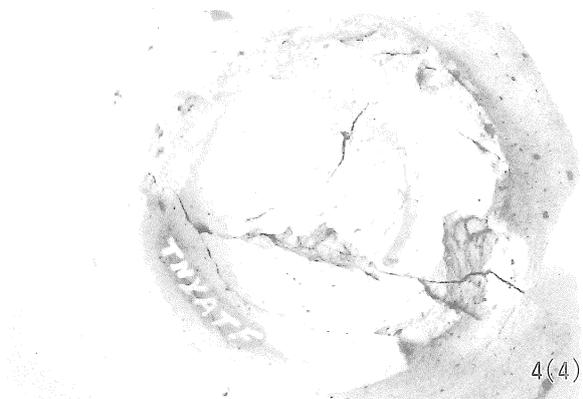
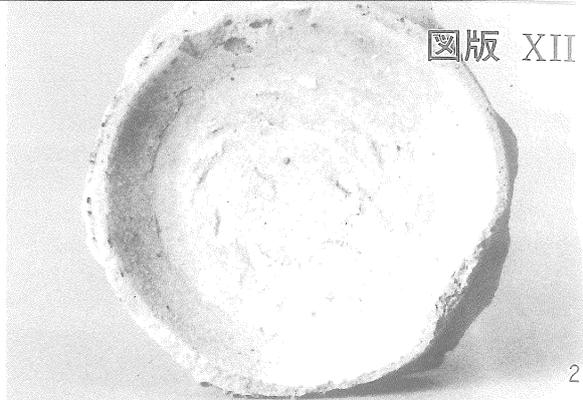
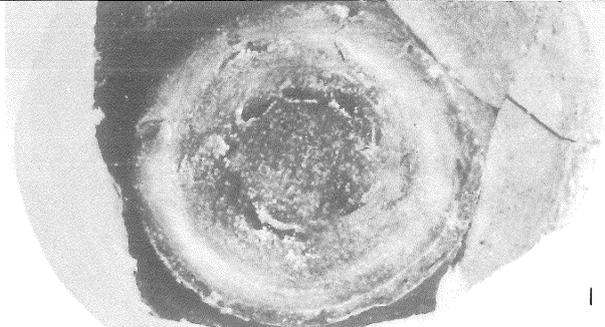


9(37)



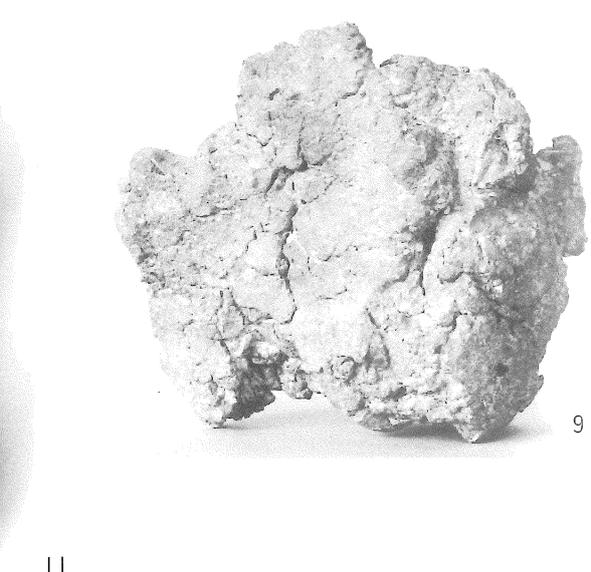
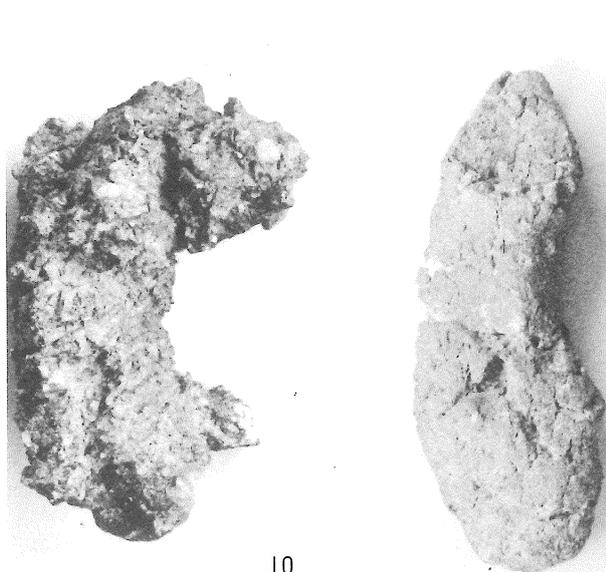
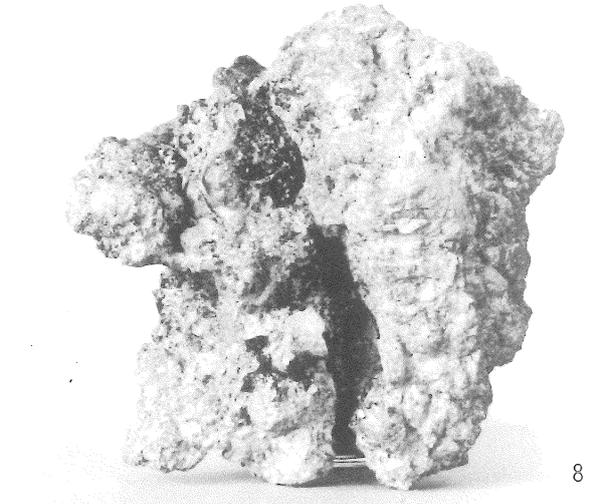
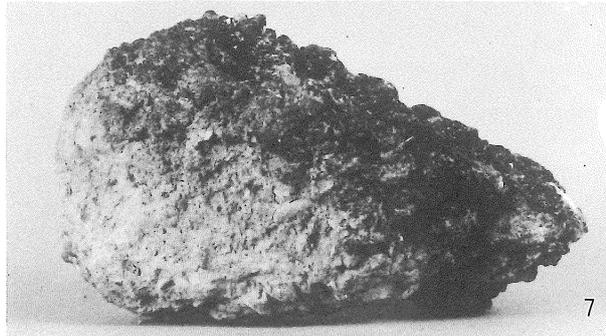
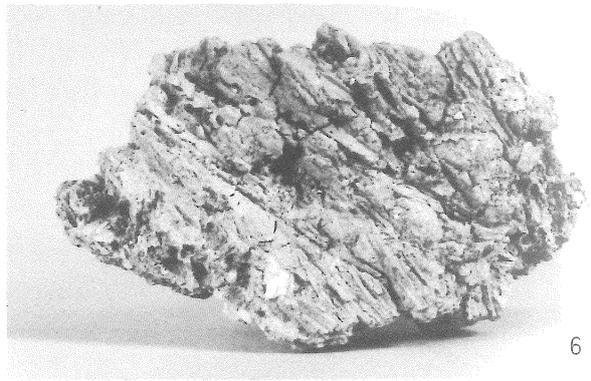
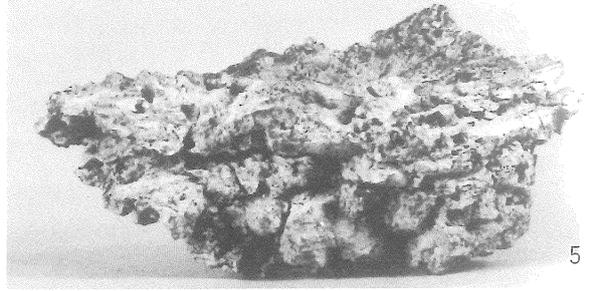
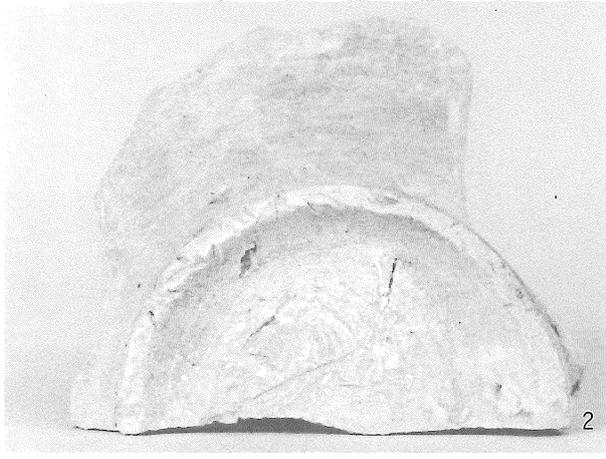
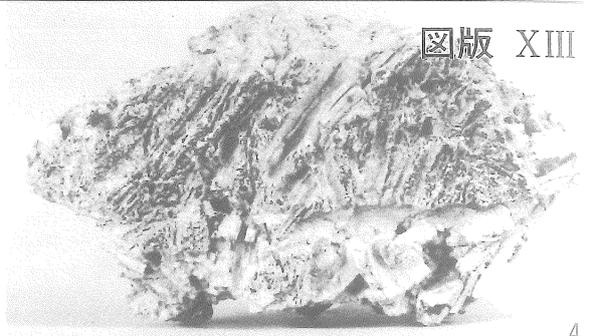
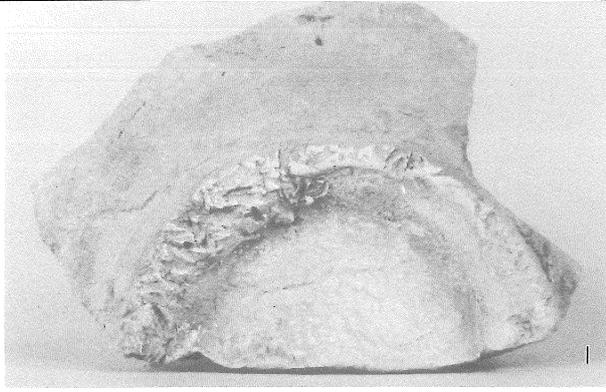
5(23)

遺物 3 (天井架構材
融着土器 2)
(重ね焼成状態)
(床面材融着
状態)



遺物 4 (底部狀態)

11. 皿山古窯跡
採集土器底部



遺物 5 (底部状態)
(窯壁)
(窯道具)

10

11

二ノ谷古窯跡発掘調査報告書

昭和60年3月25日 印刷
昭和60年3月30日 発行

発行 小笠町教育委員会
印刷 株式会社 三 創
静岡市豊田3丁目5番30号
TEL(0542)82-4031